大正元年十二月二十日發行

婦人衛生雜誌

第二百七十七號

婦人衛生雜誌

第二百七十七號目次

私立大日本婦人衛生會

一月例會通知

來る一月十二日(第二日曜日)午後一時より神田區一ッ橋通り共立女子職業學校內に於て新年第一回の例會を開き、講談其他の餘興等も有之候筈に付き、在京會員諸姉の奮て御來會あらむことを希望致候

尚ほ御婦人に限り御親戚御知友御同伴被下度候

大正元年十二月

私立大日本婦人衛生會

前髪心の覇王 美人印ヘーヤロール

弊店製造の特許ヘーヤロールは原料を遠く濠洲に仰ぎ新歸朝者美容術界の明星たる岡崎エン子女史が母國への土産として持ち來りしものに大改良を加へ衛生と經濟とを兼備したる逸品なる事貴婦人界既に定評あり

ヘーヤロール前髪心壹個の目方

壹尺中	貳匁四分
壹尺貳寸大	三匁四分
壹尺五寸極大	五匁五分



講演

衛生雜話

醫學博士　今　裕

斯う云ふ席に於きまして通俗の衛生講話をすると云ふ事は大變私共の骨の折れる事であります、と云ふのは此會に於きましては永年大家の方々が、色々のお話をなされましたことも承はつて居りますから、普通の衛生上の話は自然皆さんがとうに御承知のことでございまして、同じやうな事を繰返すやうなことになりますゆゑ、詰り遲く出れば出る程損な役目を引受なければならぬと云ふやうな事になるので一應お斷りをしたやうな次第でありますが、强つての御勸めに從ひ出て來たやうな譯であります。

それですから、今日は衛生雜話と云ふ事に題を出して置きましたけれども衛生上の事は栗本さん、宮本さんにお讓りをして少し變つた事をお話致さうかと思ふのでございます。凡そ衛生と申しましても單に衣食住ばかりの問題ではございませぬ、隨分自分の家に病人の出來る事もあるのですが、其場合に醫者を賴む、醫者を賴む場合にはどう云ふ心得を有つて宜いかと云ふやうな事、又醫者にして見ましても其患者の態度、患者の家族の仕方に由りましては、大變不愉快を感ずる事もある、さう云ふやうな事からして患者或は患者の親類、それから患者の周圍の人の行り方に由つていろ／＼患者に不幸を來す事があるのでありますからして、さう云ふやうな事は成るべく避けなければならぬ、それは何う云ふやうな事柄であると云ふことや、又此頃いろ／＼な素人醫者と云つても宜しうございませうか、全く醫學上の知

識を有せない人物が何々療法とか何々術とか云ふやうなことを始めまして之れが又大變はやると申す事でありますかそれが全く知識の無い人のみならず、教育のある、殊に上流の方々の間にも信仰を得て居るやうに承はつて居りますので、さう云ふやうなものは成程一面に於て多少良い事もないではないでしようが、さう云ふ事をなさるには何だけの事を考へて居らなければならぬと云ふやうな事を、色々取纏めてお話を致さうと云ふ考でございます。

第一に醫者を頼むと云ふ事、病人があつて醫者を頼むに、どう云ふ醫者を頼まなければならぬと云ふやうな事に就ては、是は昔から有名な、貝原先生の養生訓にも、醫者を選ぶ事と云ふ一ケ條がある位であつて重大な事になつて居るのであります、併しどう云ふ醫者を選んだら宜いかと云ふ事になると中々困るのです、さう云ふ事に就ては深くは申しませぬ、唯何事も宜いと思召す、世間で評判の好い醫者をお頼になれば間違ひはない、評判が好いと云ふても學問もあり、經驗もある方を御頼になれば宜いと云ふ事にして置きます、併し一度お頼になつたならば、飽までも其醫者に信頼せられて一切の事をお任せになると云ふことが一番大切であらふと思ふのでございます。兎角醫者の立場から患者を見ますると、いろいろなお客様がある、中には醫者の言ふ事を本當にお用ひになつて、例へば糖尿病で甘い物を食てはならぬと醫者が申しますと、今死際になつて、どうせ食べても食べなくても助からぬと云ふ場合になつても、醫者がいかぬと言つたからと言つて欲しい菓子を食べない人もございますし、又昔し去る大名が醫者の勸めにより大變好物の蜜柑を斷然御止めになり少し位は宜しかろうと御勸め申した侍臣を却て御叱りになつた有名な話もある位でありますが或は又ナニ醫者はさう云ふけれどもちつと位は宜からふと言つて餘りお用ゐにならぬ方もある、いろ／＼でございますが、醫師の心情を御汲になつてなる可く御用ゐになる樣に願ひ度いのでございます、醫者の患者

に對して希望して居ります事は診斷を受くるに當つては可成手短かに病の起り經過の模樣を話して頂く事でありまして中には診斷治療に關して種々御自分の意見を述べられ氣の弱い醫者を困らせなさる方もある樣に承はつて居りますが此等の事は一切自分で御信用なさつて御頼になつた醫者の知識と經驗とに御信賴なさるが第一と存じます。

これから御親戚であるとか、御友達であるとか云ふ方々が患者に對する御親切から彼の先生は見立が惡いと云ふ評判でございますからお醫者をお取換になつたら宜しうございませう。私の掛りつけの醫者はさう云ふことに就て上手なさうでございます、と云ふ樣な風に色々御心配なさる方がある之れ誠に人情でありますが御控へなさる方が宜しい樣に考へますそれは西洋でも矢張り同じ事で、西洋では醫者を推薦なさるのも其醫者を斥けるのも多くは御婦人である、それであるからして醫者が兎に角或る病人を診察する場合には其病氣が何であるか、病原は何であるか、どう云ふ處置をしたら宜いかと云ふ診斷をする事の外に、其患者の女のお友達は何んな人であるかと云ふことを能く知らなければならぬ、斯う云ふ醫者の作戰計畫が教えられて居ります、御婦人には甚だ失禮な申分かも知れませぬけれどもさう云ふことを言つて居るのでございます。それでありますからして、各々人に由つて病人に對する考の違ふ場合もありませうし又治療法、藥の加減と云ふやうなものも色々ありませうが、それは矢張り主任の醫者に　切お任せになると、不幸の結果を招くことが少いことになると考へるのであります。實際氣の弱い御醫者であると實際周圍の干渉の爲めに思ひ切つて自分の信ずる處を行ふことを躊躇しなければならぬと云ふことになる、のみならず自身にも亦いろ〳〵迷ひを來すこと丶なり、從つてそれが患者に對して不幸の結果を來すと云ふやうなことになる場合がないとも限りませぬ、それで醫者を交換する事は古くから誡められて居ることであります。昔の本にも面白

いことが書いてあります、いなご草と云ふ本でありましたが『何病にても本復を急ぐ事悪るし』何病でも本復を急いでは悪い、總て病には始めがあり終りと云ふものがあつて、いかに急いだところで治る時が來なければ癒らぬ、餘り急いで醫者を取換ても療法の次第違ひて愈々本復遲くなると云ふ様な意味のことがありますが、例へば窒扶斯のやうなものは、三週間なり四週間なり、定りがあつて、熱を減じたいと思つても熱が降るものではありませぬ、却て下熱劑を飮ますだけ悪いと云ふものでありますし、疱瘡の様なものでも御承知の通りちやんと幾日經たなければ治らぬと云ふやうに定まつて居るものもありますからして、さう云ふことを幾ら焦つて見た所で仕方がないのであります。殊に或る患者に對しては下劑を飮まして、後で下痢を止める藥を飮ませやうと思つて居ると、下劑を與へただけで醫者を取換える、さうすると次の醫者も矢張り前の醫者のやうに初めからの療法を更に繰返すと云ふ結果になる、さう云ふ事は間々ある事で大變患者に取つて不利益なことであります。

それから立會診察のことであります、此立會診察と云ふのは能く行はるゝことで、どうも彼の醫者一人では不安心であるからと云ふので、第二第三の醫者を頼んで立會つて診察して貰つて、さうして相談をして患者の處置をなすと云ふ事、是は甚だ結構な事であるのですけれども、併し立會診察と云ふことの效力は甚だ薄いものであります。即ち醫者が二人となり三人となり其責任が段々に、澤山の人に分たるる程自から感ずる事が幾らか薄らいで來る、さうして意見を述べる段になつて來ると、どうも思ひ切て前の醫者に反對な意見を陳べる事を皆躊躇する傾きがあります。而して人の前で醫者の顏を潰すやうな事又はお互に意見を戰はして爭ふと云ふやうな事をば避けるやうになつて、先づ立會ふ醫者が三人あると、初め二人の意見を聞き、第三の醫者は大概何方の顏も立つやうな意見を述べてお茶を濁す、さう云

ふ結果を來すやうに承はつて居りますから、是は詰り利益の無いことであるのであります、又實際現在診斷治療の法が昔と違つて著しく進んで來て居るので多人數の相談を要する場合は割合に少ないのであります、併しそれも主治醫に相談をして誰を賴んだら宜からふ、貴君の信用する人を賴んで此病氣に就て二人で相談をして貰ひたいと云ふやうな立會診察は最も結構なことであります、さう云ふ事は實際之を行つても宜しい事であるし、又さうなくてならぬことのやうに考へて居るのでございます、殊に手術を要する患者にあつては何んな醫者でも手術をすれば其病氣が治るとか或は治らぬとか云ふ手術上の結果の斷定は出來ない場合が澤山あるのであります、如此場合には漫りに多人數の意見を徵して時機を誤るが如き事なく、可成其方の專門家中にて、自己の信賴する人に一任する事は甚だ緊要な事であります。如此次第でありますから立會診斷等の事は、宜しく愼重の態度を以てなさらなければならぬと信ずるのであります。

それから此頃專ら一般に行はれますいろ〳〵なる非醫者の通俗の療法、先刻お話致しましたやうな紅療法であるとか、氣合術であるとか云ふやうな、様々のものが方々に行はれて居ります、それに付て私の考へをお話致さうと思ふのでございます、一體斯う云ふ色々なる民間療法と云ふやうなものは、行はれ易い道理があるのです、それは何う云ふ譯であるかと云ふと、實際治らない病氣と云ふものは澤山ある、又醫者に何うして治療をしたら宜いか治療の方法の分らないものも幾らもあつて、唯〻自然の經過に任さなければならぬやうなものがあるのでございます、併し人間には矢張り欲と云ふものがあるので、臨終の際に至るまで何とかして助かる途がありさうなものだと云ふ希望は誰しも皆有つて居るのでございます、それでまあ別段藥を用ゐるには及ばないが攝生をして靜かに臥てお居でなされば何方かに片が著く、と云ふやうな醫者から宣告を受けますと、何

となく心細い、さう云ふ場合に親類の方などがお出でになつて貴君と同じやうな病氣が氣合術で治つたと云ふやうな話を聴くと、それが利くか利かぬか知らぬけれども、一つやつて見やうと云ふやうな工合になるのは、是は誰でも自然の人情であるのでございます、愈々醫者が外に方法が無いと云ふことになると、昔であれば加持祈禱をする、今日のは多少學問的の理窟に合ひさうな看板を出して弱者を犧牲にして利益を計ると云ふやうな人間が澤山出て來る、又惡い考でなしに本當に自分の術が效力があると信じて居つて、さうしていろ／＼なことをする人もあるでありませうが、今日行はれて居る多數は餘り眞面目な考へでなしに、患者の弱點を利用して自分の利益を計らふと云ふやうな人間が大多數を占めて居るやうに承はつて居ります、勿論醫者の施しまする治療も極めて簡單なるものもあります、例へば便通が惡いから下劑を飮ます、灌腸をする、自分の子供が病氣をしたとか、子供の大便が詰つた時には、どうしたら宜いかと云ふやうなことは大概素人でも知つて居る、一寸した治療で病氣が輕快する、餘程心配したものが簡單なる處置で直きに恢復すると云ふ場合も多くあるのでございます、それですから少し理窟のありさうなもので、人が斯うしたら宜い、斯う云ふ方法でやれば病氣が癒ると云ふやうなことを聞いたならば成程さう云ふ理窟もあるかしらんと云ふ考を起して參るのは無理ならぬことゝ思ふのであります、是は日本ばかりではなく、外國に於てもさう云ふことが行はれて居る、現に今日西洋でも唯髮の毛を二三本送つてやるとそれで病氣の診斷をすると云ふやうなことをやつて居る者もあつて、それが非常に流行して居る所もあります、ところがそれが嘗て或患者を髮の毛で診斷して結核性の關節炎を起して居つた患者を舞蹈病であると診斷した、そして是は醫者にかゝつても癒らぬと云ふことを言つて居つたところが段々關節炎の方が惡くなつて、時期が遲れた爲に、さう／＼歩くことが出來なくなつたと

云ふことがあつたので、髮の毛で診斷をした者は二ケ月の禁錮に處せられたと云ふやうな例もあるのでありますが、兎に角、自分の足が動かなくなるのに髮の毛の診斷を信じて醫者にも懸らぬと云ふやうな馬鹿が西洋にもあるのであります、亞米利加邊でも「ホメオパチー」と稱へまして特殊な治療法をすると云ふことを看板にして學校などを建てゝ居るのがある、其學校へ私は態々行つて見たこともありますが、看板はそれであるが其實矢張り今日の醫學を敎へて居るので、唯藥に少し、普通の醫者の使ふ藥の外に素人の見たことのないやうなもので色を著けるとか、或は拵へ方を違へるとか云ふやうな方法で行つて居るのであります、詰り斯う云ふことの行はれると云ふのも患者の無智と云ふことを利用して居るのであります、それで先刻申上げた通り醫術と云ふものは、患者に對する處置が極て簡單なる事もあるのでありますが、それには相當の理由があるので、處置は簡單でも、其簡單なる處置をするまでには中々複雜な知識が要るのであります、それで癒らないのには矢張り癒らないと云ふ理由がある、其理由を明かにせずにいろ／＼なる理窟の分らない、何にでも利くと云ふやうな方法の極て危險なることは無論の話、どうかすると不幸の結果を來すことがあるのは髮の毛で關節炎の診斷をして貰つた人ばかりではないのであります、私の知つて居る者にもさう云ふやうな例が幾らもある、まあ下等社會になりますと家の子供は工合が惡いやうだがどうしやうか、お醫者さんを招ばうかと云ふ場合に、それは醫者などを招ぶよりも近所の誰さんの所に家傳の藥がある、大變利くさうだからと云ふので飮ます、一週間も飮ましたが癒らぬ、それでは醫者にしやう、いや何處の灸が宜いさうだと云ふので灸をやる、何をやつても癒らぬ、癒らぬから醫者に診せやうと云ふ結果になつて、もう醫者も處置することが出來なくなつてから醫者の所へ行くと云ふやうなことで、醫者が注射すると同時に死んで仕舞ふ、さうすると彼の醫者に殺

されたと云ふやうなことになる、是はさう云ふ社會には間々あるのであります、實際私共でも例へばお腹の大きい人を診てお腹の子が男でありませうか、女でありませうかと言はれても半分は當てることが出來る、と云ふのは男か女か二つしかありませぬから、男と言つたところが女と言つたところが半分は當ります、百人の中五十人は何方か大概當る譯でありますが、別段當らなかつたところでどうと云ふこともないのでありますが、偶々當ると彼の人は男と女を見分ることを知つて居るのか知らんと云つて信仰すると云ふことになる、病氣でも實際さう云ふ場合があるのであります、源平盛衰記かにこんな事が書て居る、正安四年には大變天候が旱魃でありまして雨が降らない、甚だ困ると云ふので比叡山の澄憲と云ふ坊さんに、祈禱をさした、三日三夜祈つたところが滿願の日に非常に澤山雨が降つて、それから三日三夜續いて雨が降つた、其時に淸盛が『人の病の休まる頃に醫師は驗あり、是れを醫師の高名と云ふ様に、春の頃より旱して五月雨の降る頃に說法仕合して澄憲が高名と人の沙汰すらん事いとをかしき事なり云々』即ち春から雨が降らないで、五月雨の降る頃に祈つたから雨が降つたのである、斯う云ふ事を言ふて居りますが、實際さう云ふ場合に出會すことがある、癒る頃になつたからして偶然に、今まで方々の醫者に行つても癒らぬのが治ると云ふやうな事がある、恰度治る時期が來て居つてそれが癒つたと云ふことになると、それが詰り其人の功名と云ふことになる、さう云ふ場合があるのでありますからして理窟の無い、又深い根據の無いことは餘程の信仰すべき評判の好い人であつても、之に利用されないやうに御注意なさるが肝要だと思ふのであります。此頃は斯う云ふやうな事が流行して、何でも彼でも下腹を膨らして居ると癒ると云ふやうなことを信ぜらるゝ傾きがあるやうに承はつて居りますから御注意までに申上て置くのであります。惡口ばかり申上て相濟みませんでした。而し斯様な

ことは實際病人の診察に從事して居らる、醫者の口からは申し惡い事でありますから私の樣な病人を見ない醫者が代つて申上げた樣な次第であります。

叢談

冬の山里

醫學士　中村芳助

紅燃ゆる紅葉の岡も、木葉ふり盡してまた訪ふ人もなく、元氣よき禽鳥の囀も止み、秋は色々の草花もはや枯果てゝ、自然は今や冬眠に入つたのである。

　冬の來て山もあらはに木葉ふり
　　殘る松さへ峯にさひしき

人もまたしばらくは大氣と日光を外に閉め出して、煖爐の蔭に退隱し、僅かに冬の長夜の物語に閑を消すべき時季となす人も少なくない。

　埋火のあたりに多くはまとゐして
　　むつかたりすることこそ嬉しき

然し斯の如き生活法は、吾人の健康上には決して宜しい方法と云ふことは出來ない。西洋風の室は、大抵過度に暖められる。日本風の室内には、例に依て火鉢を以て黑炭が燃される。それに風邪に侵されると云ふ考から總ての窓や戶障子を締切る。此の如き室内の空氣の不良なるは自ら明かなる所である。屋外の運動が不足になる、衣服は大抵その宜しきを得ない、夜更をする、或は終夜騷ぎ通す、殊に東京邊の冬の夜の會、就中カルタ會などに於ては、有毒瓦斯の籠つた小室の内に十數人の人が入亂れて、塵埃溜とも稱すべき疊を打敲く、殆ど徹夜でこれに熱中する、從つて飮食も過度となり不規則となり、尚種々の害が伴ふ。此の如き狀態なれば、これが爲めに今迄健康であつた人も病氣となるに足るのである。此處に氣のついた人は、其の健康の衰へるのを防ぐ爲めに、戶外に運動を試み度いと思ふ、或は夏

季の如く旅行をしたり散歩もし度いと思ふ。所が都會の冬の道路は案外に夏よりも不潔である、煤煙の混つた霧がたつ、雨も多い。田舍路は霜溶けがして殆ど歩くに困難である。穿物も衣服も容易に汚れる、濕める、其他種々の不便がある。斯う云ふ所から自然、室の内に閉籠つてゐた方が益しだと云ふことになるのである。尤も富裕な人々には、日當のよき湘南の別莊に避寒するとか、琉球、臺灣、小笠原島、何處でも日本領内適宜の地に寒威を遁れることも出來るが、中以下の人々には、不平ながらも先づ／＼火鉢にかぢりつき火燵にもぐつて春の來るを待つより外に仕方がないと云ふ有樣である。

所が何事も不便には我慢の出來ない西洋では近年に至て冬の遊技が流行つて來た。從來は、新鮮なる空氣の中で冬の遊をする、殊に氷すべりの如きは兒童に限つたものであつたが、近頃は成人が盛にこれをやるやうになつて、冬期に於て身心を爽快に保つに頗る有效なものであることが認められ、避寒と云ふよりは寧ろ寒を樂むと云ふ方の種々の遊技が工夫せられ、所々にこれが爲めの遊技練習所が開設せられ、從つて寒季に對するあらゆる便宜が設けられて、餘り金の無い人でも冬休の間十分その健康を恢復し、増進することが出來るやうになつた、それでこの兩三年前よりは、獨逸と瑞西の境の高山地方などにも、毎年冬になると、燻つた陰氣な歐羅巴の都會から、數千の人が、晴々した空氣の良い山に集つて來る。而して從來人々の賞揚する所の避暑よりも衞生上、健康上、結句この冬の保養の方が效驗が多いと云ふので、年々冬場所が繁昌する趣である。依てこの冬遊びの賞讃者等の云ふ所を少しく左に紹介する。

冬期間の山中滯在は夏よりも種々の優つた點がある先づ山地では夏よりも氣壓が低い、從て夏よりも氣候の變化が少なく溫和である。平地と山地との氣溫の差も春や夏よりは少なく、從つて平地から高地に移つても餘り急激の變化を氣遣ふ必要がない、尙は夏は山でも隨分暑氣を感ずることがあつて、神經を

活潑にする代りに却て惰慢にすることがあるけれども、冬は全身の機能を高めるものである。冬の平地は大抵雨や霧が抱和して居る有様に引代へ、高地にありては日光曝晒の盛なるが特徴である。多くは空に雲なく、日光は終日その快き溫を作用せしめ、四方障碍なき高原にあつては殊にさうである。且つ皚皚たる白雪はよく光線を反射し、これを遮る大厦高樓もなく、蔭となるべき樹木もない。又日光は所謂眼に視ることの出來ない化學的光線或は紫外線に富んで居るので、皮膚には殊に佳良の作用を呈する。此の如く盛に日が照らすから、山では、かなり低い氣溫も餘り寒くは感じない、夏服で以て終日散歩することが出來る位なもので、高山は平原や谷間よりも冬は比較的氣候が溫和なものである。

其他冬の保養の夏に優る點は、空氣が非常に淸潔で、塵埃や細菌の比較的少ないことである。工場などもなく、馬車や自働車も通らず、雪は二三ヶ月間常に地面を覆ふて居り、偶々塵埃が立つても頻々として雪が降るので皆沈められてしまふ、殊に前山風を遮ると云ふ所では、全く淸潔な溫和な空氣の中に生活することが出來るのである、雨も亦殆ど降らない、降つても至つて僅かである。從つて夏よりも空氣の濕氣が少ない、平地や谿谷の地は冬も屢々霧が起つが、山地の冬は概して乾燥して居る、霧が起つても只早朝或は晩遲くなつて起るに過ぎない。

山の氣溫は今も云ふ通り案外甚だしく寒くはない、併し多少身にしみる、こゝに於てか十分運動することが必要になる。そこで汗の分泌が高まり、血液の循環が盛になり、新陳代謝が良くなる。即ち血液は速かに全身を循つて、肺よりは多く炭酸を排除して、多く酸素を攝取し、體内の燃燒作用が盛になり、これと同時に汗の分泌が高まつて、體内の不用物質を外に出す。

斯の如くにして、山中に於ける冬の氣候が、如何に有益なる作用を吾々の身體並に精神の上に及ぼすかは、少しく衛生の事を承知して居る讀者には敢て說

くの要もなからうと思ふ。

次に冬の山の景色は、里人の到底想像も及ばぬ程美しいものである。特に高山にありては、一種不思議の別世界の觀がある。滿山只白の綾羅を被ふたるが如き中に、所々雪重げに喘ぐ杉檜、垂氷の瓔珞を懸けたる樅の木立、枯木も花咲く雪景色は、實に異樣の觀を呈するが、雪降り積りたる間の邊に日の射するあり、この總ての景色を超えて深碧色の雲無き天は瑠璃の吊鐘かとばかり穹窿を張つて居る。高山の冬の自然は實に莊嚴の美に盈ちてゐる。特に深山の雪景色を知らぬ人に紹介したいのは、その曙の美觀である。余は曾て冬のさ中に出羽の國を通過したことがあつた。同行二人橇を雇ふて未だ明けやらぬ冬の曉を北より南へ驅けたが、恰も天童驛を離れて山形市に向ふ途中、ふと東の山を望めば、怪しむべし、白銀の牀の置物の如き峯と峯との間に一點紅玉の如き微なる赤味がさした。見る〳〵紅玉熔らけて流るるが如く大なる畫工の刷毛一抹、白雪の山光りを增すと同時に、紅は一段鮮かなる色となつて、西の方遙かに月山湯殿の山腹に反射して、冬の夜ながはほの〴〵と明けそめたが、銀世界の中に於けるこの二三十分間の天然の變化極りなき不思議の現象に始めて遭遇した余等は、たゞ恍惚として此世とも覺えず、やがて夢より醒めたるものゝ如く、思はず同時に嘆美の聲を放つたことがあつた。極地に於けるハローの不思議に美しき現象は話には聞てゐたが、よもこれには過じと思はれた。

冬の山地に於ける此の如き魔術的の莊嚴なる美觀に由て受くる所の印象は、吾人をしてあらゆる煩惱より解脫せしむるに足るものである、憂鬱は去つて活氣と元氣とが湧て來る。天に近いと感せられる、こゝ高山には、眞に生命の若やぎの泉が迸しる。これは必ずしも高山と云はぬ、我邦に於ては十里を出ずして大抵何處にも斯の如き山はあるのである。

扠てこゝまでは未だ一言も遊技に及ばなかつたが、山間に於ける冬の遊技こそ此處に紹介したいと思つた事であつた。併し餘り長くもなり且つ遊技の健康上に於ける關係は、大體これ迄も幾度か此の雜誌上に說かれたと聞いて居るから、今又くだ〳〵しく此處に述ぶることは遠慮して、只特別なる冬の遊技に就て一言しやうと思ふ。

生存競爭の激しい爲めに、自然身體並びに精神を消耗することの甚しい今日の世にありては、昔よりも一層保養が必要である。而してこれには經驗上遊技が最も效能がある、遊技と云ふては少しく語弊があるが、兎に角全身の適當なる運動が最も效あるものと認められて居る。體操、漕艇、乘馬、遊泳、野球、氷辷等は既に久しく世に知られて居る遊技であるが、西洋では更に冬の遊技が加はつて來た、即ち從來子供等がやつて居つた雪辷り、雪擲、雪轉、橇遊、ボブスライ、スキー、カーリング其他種々樣々の遊技があつて、近來は國民的の遊技となつた即ち廣く流行するやうになつて、本來の遊技と云ふやうなやかましい意味はなくなつた。

一體遊技と云ふのは英語のスポートと云ふのが原で、最高の身體的動作を目的としたものであらうが、右に云ふ如き普通の場合には、決して此の意味のスポートではない。只一定の法式の下に、一定の手段を以て、例へば水泳、漕艇、旅行等により、或は一定の補助法、例へば野球、自轉車、橇等に依て自由に身體の運動發育を計る方法に過ぎないのである。それで冬の遊技と云ふても、最高の身體的動作を目的として奮勵すると云ふ譯ではなく、只冬季に於て戶外で運動をすることを云ふのである。

この冬の遊技の目的は、主として前に述べたる如き佳良の氣候的條件の下に、全身の筋肉を働かしめ、これと關聯して全身の神經系を良くするにあるのである。

滑靴を穿いて面白く走つて遊ぶには、餘程練習しなければならぬ。初めて滑靴を穿いて氷の上に起つ者

は、身體の平均を保つ爲めに、あらゆる筋肉を交互に働かさなければならぬ、少しぼんやりすれば直ぐ顛倒る。併し漸次練習するに從つて、これに必要な筋肉は、滑つて遊ぶに何の苦も感せぬ迄になる。スキーとか其他のものも矢張同樣で、特に大膽にクールベを描き或は凹凸の所を乘り越す際などには、敏活に重心點を換へて身體の平衡を保たなければならず、脚の力に依てその器械の惰力を制して行かなければならぬ、その場合〳〵に依て卽坐に臨機應變の態度を取らなければならぬから、凡て此等の遊技には、極めて敏捷にその瞬間を利用することが必要になる。從つて勇氣と果斷とを要するので、神經系統も自然引締つて鍛錬されることになるのである。これが冬の遊技の特徴とも云ふべき所であつて、山に於ける遊技には、總ての方面に多少の危險がある。從つて常に注意を怠らず、速かに思考し、卽坐に決斷する。故に總ての神經が絶へず緊張して居る、狐疑躊躇を許さない。困難の來るやこれに對して電光石火の如く處置しなければならぬ。尤もこれは無謀に狂的の勇氣と變じてはならぬが、克己の情、確乎たる氣分、險難にも打勝ち得ると云ふ心の喜びは、一種の言ふべからざる滿足の情を與ふるもので、これが吾々の全身に極て佳良の感作を及ぼすものである。冬の山里に於ける良好なる氣候の利益、莊嚴綺麗なる冬景色の良影響、遊技の練習に際して困難に打勝ち得たる確然たる心の喜び、これより起る所の自信、尙ほ職務及びその他の日常の煩慮より自由を得、都會の忽忙喧騷より遠ざかること、此等が山地に於ける冬の遊技の特に健康上に有益なる要素である。冬の遊技は、確かに日常の生存競爭に疲れ果てたる吾々の神經を恢復し、元氣づけるには極めて有力なる補助法である。其他の遊技若しくは夏期の避暑保養よりも勝つて居ると云ふて差支がない。余は我邦に於ても冬の山に遊ぶ人が多くなり、冬の遊技の盛んにならんことを希望するものである。

外科手術に對する嫌忌

古津敬仁

手術を嫌ふとか、恐れるとか云へば、今日では可笑い位なことで、普通の病人は、商賈人が取引をし、旅客が汽車や汽船で旅を企てる程の覺悟で手術を受けます。外科は、その技術の進歩と共に、大に世の信用を増して參りまして、恰も現代の人々が山路に自働車を驅り、高架鐵道や地下鐵道に依て、眼の眩るやうな高架橋を通過したり、長い〳〵トンネルを潜つて何とも思はぬやうに、安心して、その身體を手術に任せるやうになりました。

こうは申しますものゝ、まだなか〳〵皆さうと云ふ譯には參りません。隨分小刀を怖がる人が少なくない。寧ろその成分もよく分からず、效能も疑はしい藥は悦んで用ゐる、一歩誤れば忽ち生命にもかゝはる劇毒藥でも平氣で服用致しますが、切開と云ふことになると、小さなネブトでも、首を切られるかの如く恐れて厭がるのであります。これは何うしても開けない國の人に多い、都會の人よりも田舍の人に多いやうであります。日本のみではない、西洋でも何處でも、やはりさう云ふ傾向がありまして、此間も獨逸のある大學教授が、一人の小兒を手術することになつて、その準備も整い、いよ〳〵手術に取掛るばかりになつて居つた、所が手術を始めやうとする間際になつて、その父親から電話で以て、小兒の手術は取止めにして呉れいと斷つて來た。この小兒に施す手術と云ふのは、上脚部の甚い火傷の爲めに、皮膚の移植法を行ふのであつた。これは何人も知つて居る通り、今日では頗る成績の好い方法であり、且つこの小兒は、このまゝにして置けば、その瘢痕の收縮の爲めに、脚が曲つて一生片輪者になつてしまふのである。それにも拘はらず斯樣なことを云ふて拒絶した。そこで教授は大に慨嘆して『此男は、中世期的の思想を以て、外科學進歩の賜をその兒より奪はんが爲めに、最近世的に、吾人の交通機關の

一大進歩の賜（電話）を利用したと—皮肉を申しました。

實際どうかして、その人の爲めに、出來るだけ善い方法を盡してやり度いと思ふてゐる醫師が、斯う云ふ事に遭遇するほど情ない事はないのであります。此の如き無智蒙昧に對して苦々しく思ふのは單に外科醫のみではない、止むを得ぬことゝ致しましてもこれが單にその病人一人の不利益に止まれば我慢も出來ますが、その手術を忌むと云ふことは、衆くの人々の健康上に迄も重大の關係を持つて居るから困るのであります、即ち病人自身でも、これは何うも外科向の病氣であると承知してゐましても、前の様な人は、何に、それは外科などに行つて痛い目をしなくとも、何處そこの觀音様を御信心になれば恢復なる。又は斯う云ふ禁厭をすれば直ぐ治癒るとか、何と云ふ膏藥を貼つて沿けば自然に治癒るなどゝ、誠しやかに、茶飲話の序に、人の身體の一大事に關することを雜作もなく言ひ聞かせますので、病人も遂その氣になつて、宜加減なことをやつてゐる。その間に多少效があるやうに思はれると、ます〳〵深く迷ひ込みますが、いよ〳〵惡いと云ふて醫師を問ふ時は、既に手遲になつて居ることが多いのであります。例へば何人も御承知の癌腫の如き性質の惡い病氣に罹つた人には、よくありがちのことで御坐いまして、これは愚人に惑はさるゝのみならず、醫師が診て確かに癌腫である、癌腫は斯く〳〵のものであるから、是非外科醫に就いて治療を受け、直ぐにも手術をしてもらふやうにしなければならぬと懇々勸告をしても、手術と云へば、とかく引込思案になり、拒絶忌避の姿である。而してぐつ〳〵數週間も過ぎて、哀れな有樣になつて、いよ〳〵自分から手術を希望して來る頃には、もう手のつけやうが無い、強いて手術を施して見ても餘り望が無い、少なくとも良い結果は得られないと云ふ狀態になつてしまふのであります。

尤も手術を延ばしたからと云ふて何れの病氣も必ず

ずしもさうなると云ふ譯のものではありませぬけれども、一寸手術すれば、直ぐ治癒つてしまふべきものをも兎角躊躇して、治癒し難いものにしてしまひ、或は不自由を忍び難儀をこらへて、危險を身に懷いて居る人々も少なくない、例へば盲腸炎とか、ヘルニア或はブルックなどゝ云ふものゝ爲に、十分仕事も出來ずに、長年不自由と危險とを忍んでゐる人もありますが、これらは今日では比較的簡單な手術で以て、よくなることが出來まするし、曲つた足で一生跛を引いて居るものも、適當の手術を施せば、隨分よく歩けるやうになるものもあるのであります。外科醫が少しく注意の眼を以て市中を散歩しまするならば、これは全く手術をせずに放擲した爲めに、此の如き生れも附かぬ不具者になつたのであると思はれるものに遭遇することが少なくない殊に前に擧げた例の如く、親が、みす〳〵その子供を不具畸形にしてしまふと云ふことは、如何にもはがゆいことであります。斯樣な父母の愚痴なるが爲めに、日本國中幾萬と云ふ不具者を產出して居るのでありまして、未だ西洋諸國のやうに、不具廢疾者の保護事業などは、一向手出しもされない、出來ないのかも知れませんが、何れこれも起るに違ひない、併しそれよりも先づ、斯樣な不具者を拵らへぬ用心が肝要である、既に不具者となりかけた者を治療して、有爲の人間となし、廢疾者たるを免れしめる方が大事であらうと思はれます。

不具畸形乃至廢疾者、少なくとも身體に故障がありて十分の働が出來ない、徵兵の義務を果すにも堪へぬと云ふやうなものが、今日の如く澤山あつては、實に一國の消長に關することで、少なくとも非常な損害である、それも全く止むを得ぬものならば仕方もないが、前にも云ふ通り、簡單な手術に依て治癒し、或は健康者と同樣に働き得るやうになる所の不具者が澤山あるから、實に遺憾に思ふのであります。それで何うかして、今日の外科的醫術の進步を知らしめ手術を普及せしむるやうに致したいと思ふので

ありますo

さて此の如く一般に外科的手術を嫌ふのは何う云ふ譯かと申しますと、大抵の人は、手術に由る生命の危險を恐れ、又一つにはその疼痛を想像して厭がるのでありますが、實際この心配は、今日では何のくらゐまで尤もとせられるでありませうか。

今から五十年前、我邦では三十年程前までは、外科手術と云ふものは、隨分怖ろしいと云ふてもよい、病氣に對する一か八かの血戰とも見做すべき場合が少なくなかつた。卽ち幸にしてうまく行けば助かるが、さもなければ危いと云ふ所謂生命懸けの手術が少なくなかつた。尤も今日と雖も、このまゝに打棄てゝ置けば、どうしても死を免れない、必ず遠からず死ぬる、併し手術を施せば、その爲めに反つて死を早めることがあるかも知れぬが、幸にして治癒し得べき見込が無いでもないと云ふ場合はありますが、こゝには斯樣な止むを得ずして施す所の手術に就て申すのではありません、それは又別の議論と致しまして、今日の外科的處置の範圍は遙かに廣くなつて居りまして、その中には豫防的の手術もありますれば、作業能力を高める爲めに施さるゝ手術もあり、形の惡いのを直はす爲めの手術もあると云ふやうな譯で、決して何時でも生命懸の仕事ではない、大抵は少しも危險のない手術の方が多いので、たゞ稀に、間違へば生命にも關はると云ふ手術があるに過ぎないのであります。

我國に於きましては、昔は外科と云へば、專ら膏藥療治で、或は灸をする、針を立て、燒金をあてる位のことで瘡瘍を療治して居たのでありますが、後になつて南蠻流の外科、和蘭陀流の外科が行はれて多少進歩し、近世に至て漸く西洋の外科が發達して今日の有樣になつたのでありまして、近代に至て急に非常の進歩發達を遂げ、昔の外科とは全く面目を異にするに至つたのであります。それでありますから、一時代前の人が外科を危ぶむのは尤もな譯であります。

我々の祖父母は勿論、父母の時代と雖も西洋外科はまだなか／＼危ない仕事で、手術の後には屢々創傷熱が起つた、或は丹毒を發し、破傷風を起し、病院壞疽など＞云ふもの＞起ることが多かつたものでありまして、西洋でも獨逸の名高いヌッスバウムと云ふ人の所で手や足の切斷術を行つた十四人の患者の中十一人は、只今述べたやうな種々の併發症の爲めに斃れたと云ふことであります。斯樣な有樣でありますから、當時の人々の手術を恐れたも尤もな次第であります。

併し此等の併發症は、何れも傳染に由るのでありまして、今日の人は素人でも皆承知して居られますが、この創傷傳染病を豫防する方法を敎へたのは、實に本年二月に物故されたリスター卿でありまして、我邦に於てもこれが爲めに盛な追悼會が行はれた程であります。このリスター卿が一千八百六十七年に始めて制腐的創傷療法を唱へまして以來、これも先年我國に來遊し、もう亡くなりましたが、彼の有名な細菌學者のコッホ、その他パスチールなど＞云ふ人々の考案に依て、ます／＼手術後の創傷病を防ぐことが出來るやうになつたのであります、これが即ち今日行はれる所の防腐的手術と稱するものであります。現今に於きましては、外科學の敎授が學生に講義を致します際に、昔の所謂創傷熱とか、病院壞疽など＞云ふもの＞例を示さうとしましても、今日の病院には左樣なものに罹つて居る病人は一人もゐないので困りますが、近頃頭部や胸部や腹部の臟器に大手術を施したとか、或は昔は手術すべからざるものとせられて居つた關節に手術を施して、而かも何等の故障なく經過して居ると云ふやうな患者は幾らでも見せることが出來るのであります。實に非常な變化と云はなければなりません。從つて昔は手術後三月も四月も病院に入院してゐなければならなかつた病人も、今日では僅かに一週間か二週間で退院することが出來ると云ふ有樣であります。

斯う申しましても、私は決して山師を言ひ或は法螺

を吹かうと云ふ考では御座いません、今日と雖も折角の手術も無效に終ることがないではない。併し尙くも今日の防腐法を心得て實行する以上は、昔の如き手術後の危險な病氣を起すことは決して無い筈であります。

次に手術を恐れ、手術を嫌ふ第二の主なる原因は疼痛であります。併しこれは既に十九世紀の中葉より麻醉法によつて、手術の際の疼痛を避け得るやうになつたことは誰も知つて居ることであります。然るに、この麻醉法には不幸の場合の起ることがありまして、昔風の所謂魔藥のかけ方では、隨分不幸に遭遇することが稀ではなかつたのでありますが、現今に至りましては、幾百千の全身麻醉を施しても、未だ一回もその爲めに不幸を來した例がないと云ふ病院及び外科醫は幾らも御座います、併し麻醉の爲めに絕對的に不幸を來す場合が無いとは斷言が出來ません、兎に角麻醉死と云ふものは有り得べきものであると云ふだけの理由で以て、出來得るだけ手術を躊躇しなるべく、手術を避けるやうになるのであります。

そこで、何うかして全身麻醉を施さず、而かも痛みを感ぜしめずして手術を行ひ得る方法は無いものかと云ふ問題は、隨分熱心に硏究されまして、これも遂に成功致しました。卽ち全身の感覺を一體に鈍くすると同時に、手術を行ふ部分は局所麻醉を施しますれば、種々の手術を行ふことが出來る、かなり大きな手術も平氣で行はれる、これは外科手術上の一大進步と云はなければなりません。それで全身麻醉を恐れる人には、最も適當な方法でありまして、コカイン或はこれに類似の藥品が發見され、レクルース、シエライヒ、近頃ではブラウンなど〻云ふ先生方が種々その應用法を工夫致しまして、ますく〳〵うまく行くやうになりました、卽ち手術を致します時には、先づその前の晩から準備を致しまして、適當な內服藥を與へて、一晚十分睡眠し、身體に力がつき、而かも一體に感覺が鈍くなりて、物忘をしたり、伱

り心配をしたりするやうなこともな、氣が落著いて手術室に入ることが出來るやうに致します。そこで手術をする部分に注射して其處だけを全く無感覺に來します。かうすれば少しく忍耐と注意さへすれば、患者は何もかも承知してゐて、而かも痛みなく、別に興奮することもなくして餘程の大手術を受けることが出來るのであります。實際この場合少しも痛がない、全く疼痛を感じません。手術の始のみならず、終まで痛を感じない、これは附添の人が傍に見て居つて證明することが出來ることで、患者は人術の終に往々大欠伸をしたり、多少呻吟する位で人術の終ることが多いのであります。それで素人の人には、小刀を以て皮膚や筋肉を切開き、鋏を以て身體の内から物を截取つたり、鑿を以て骨を削つたりするのに、病人が平氣な顏をしてゐるのが不思議に思はれる。併し眞に最新式の方法を以て得意に刀を振ふ所の外科醫には、もはや少しも不思議のことではないのであります。手術後の疼痛も、適當の藥に依て防ぐことが出來ます。且つ防腐的手術の後に治癒つて行く所の創には、疼痛は無いもので、繃帶、殊に人の恐れる所の拔絲、卽ち創を縫ふた絲を拔くのは非常に痛いとか、危險だなどゝ云ふ人がありますけれども、これは何でも無いことであります。創傷を開いたまゝにして置かなければならぬ場合もありますが、それには又それだけの方法があつて、繃帶交換に堪へ得るやうに致します。

此の如く現今の外科手術の有益なることは、何れの病院に於ても承認さるゝ所でありまして、何の病室に入つて聞いても、患者は手術の疼痛の無いことを證明するであらうと思ひます。

今日では、手術を恐れ、手術を嫌ふべき理由と云ふものは甚だ僅かな譯であります。斯樣な事實が、敎育あり見識ある人々に依て、更に普ねく一般の國民に傳へ知らしむることが出來ましたならば、誠に幸ひなことで、手術は痛いものである、危險なものである、何うか切らずに濟ましたいと云ふ、昔の想像

的恐怖嫌悪の情を一掃することが出來ましたならば、新に健康と作業の能力とを贏得ることは如何ばかりで御座いませう。

美しき手

笛野小侍

日本婦人は、故意とではないが、時々脛を露出はすことが御座います。これは西洋にも評判になつて居る位で、善い風儀か悪い風儀か、それは暫くお預りと致しまして、彼の兼好法師の徒然草にも『久米の仙人の、物洗ふ女のはぎの白きを見て、通を失ひけんは、まことに手足膚などのきよらに、肥え膏づきたらんは、外の色ならねばさもあらんかし』などゝ御座います通り、人間の身體、殊に婦人の身體と云ふものは、如何にも美しいもので御座います。裸體畫が繪畫の中心として賞鑑さるゝも尤な次第であります。併し現今の文明人種は、大部分その身體を衣服にて包み隠して居りますから、通常は僅かにその隠し殘されて居る顔面とか、手足位の處で美を誇て居る譯でありまして、日本婦人は過つて白脛を露出はすことがありますが、西洋婦人は、故意と自慢に白腕を出す、それから握手を致しますので、腕や手の化粧には随分苦辛する様子であります。腕は兎も角、手先は我邦の婦人と雖も、握手こそせざれ、兩手を疊の上に揃へて一禮をする時には、随分目立て見えるものである、況や親しく火鉢を擁して物語をする際に翳したる手、或は炭をつぐ時の手などは、殊に目に付くものであります。

小兒の手は、紅葉のやうな手をついて……などゝ形容しまして、誠に可愛らしいものでありますが、成人の手にも羽二重餅のやうなフク〳〵して優にやさしい手があり、握れば榮螺の如くゴツ〳〵して苔も生えてゐるかと思はれるやうなむくつけき手も御座います。又白魚を並べたやうな指もあれば、芋蟲を集めたやうな指もあると云ふ譯で、大きな手、小さ

い手、薄い手、厚い手、長い手、圓い手、種々様々の型が御座いまして、これは天性で殆ど致し方がない、先祖より代々永い間に種々の原因に依て一種特有の形を成して來るものでありませう。それで所謂貴族的の手と云ふべき型があり、百姓の手と云ふべき型があります。併し又其人の職業に依り、平素の嗜に依て著しき差を生ずるものあります。それで近來は犯罪人を取調べますに、精密に手を檢査致します。それは單に昔風の手相を考へて、これは泥棒の手であると云ふのでは御座いません、尤も刑事人類學と云ふ一派の學説の方より、斯う云う手相の者は犯罪人が多い、或は犯罪人の中には斯う云ふ手相の者が少なくないと云ふことも申しますが、一寸手相を見て、これは犯罪人の手相であるから窃盗をしたに相違ない。或は未だしないかも知れぬが、犯罪人の手相があるから何れ強盗でもするに違ないから終身懲役にして置くが宜しいと云ふやうになつても困りますから、極端には申されませんが、多少さう云ふ型が無いでもない。殊に近來は指紋法と申しまして、指の頭の腹の所に波の如く渦の如き紋がありまするが、それを墨で以て型を取る、つまり拇印のやうにして紙に押し或は他の方法を以て其紋を取ります。これが刑事上には大變益に立つ、例へば殺人犯がある。その時に現場を調べますと、戸とか、壁とか、窓などに血の附いた手の痕或は指痕が遺つて居る。それから其の嫌疑者が擧げられる、或は自首する。そこで指紋を取つて、前の戸や壁にあつた指痕と比較致しまして、指の大小長短、殊に指紋が一致して居れば、これは有力なる證據の一つとなるのであります。これ畢竟、手の形、殊に指紋は各人固有のものであつて、如何ともし難いことの例證と申すべきものであります。

次にその人の職業、嗜好又平素の衞生上に於ける精、無精の程も手で知られるものであります。

ある醫師が聘れて病家に參りました。見ると病人は、何うやら蒼白い顏をしてゐる。先づ脈を診やうとし

て病人の手を執ると、驚くべし、既に紫藍色を呈して居る。これはチアノーゼと云ふて、もう心臓の働きが悪くなつて來て、生命も覺束ない症候である。そこで直ちに隣室に入つて、妻君に向ひ、聲をひそめて病人は危篤の状態に陥入つて居ることを告げましたので、妻君は大に驚き、それは何うも不思議なことがある。實は病人と云ふても、ほんの鼻感冒ぐらゐのことで、少し氣分が悪いからと云ふので、用心の爲めに診て頂く積で御座いましたが、何うして急に左樣なことになつたので御座いませうと、非常に驚き且つ悲みましたが、醫師の云ふのには、併しどうも手が紫藍色を呈して來て居るから兎に角危險である　と云ふと、妻君は初めて顰めた眉を開いて吹出し、左樣で御坐いますか、それならば安心致しました、良人は染物商賣で御坐いますから、手は何時も藍で染つて居りますと云ふて、大笑になつたと云ふ話が御座います。これは西洋の話で、日本には今日それ程の藪醫者は居りませんが、職業に依て手の色までが異ることが御座います。

次にこれは日本の昔の話でありますが、米搗人足が、武士の振をして、島原とか吉原とかに遊びて行つたそうであります。そこで花魁とか藝子とかゞ、貴下の御手は恐しい固いと云ふて不思議がつた。然るにこの米搗男ぬからず、如何にも左樣であらう、身共は武藝の師範であるに由て、自然竹刀、木劍の胼胝が手に出來て斯樣に堅うなつて居るとやつた。所が其女、武士の娘の理由あつて斯る賤業に墮落した者のことゝて、木劍や竹刀で出來る胼胝はよく知つて居りますので、この男の手の胼胝は決して武藝に依て出來た胼胝ではない、第一その出來て居る部位が違ふ、これは何うしても砧とか杵に依て出來たものに相違ないと云ふて、遂に米搗男の化の皮が剝れたと云ふことであります。實際手は爭はれぬもので、佛蘭西の諺にも『余に汝の爪を示せ、然らば汝の何人なるかを告げん』と云ふ言葉が御座います。又年齡に依ても著しく異つて參ります。顏は如何に若さ

うに見えましても其人の手を見ますならば大抵年齢は分かるものでありまして、二十代と三十代でも既に異りますが、三十代と四十代とでは、その肉附と云ひ、皮膚の光澤、皺襞の具合が餘程目立つて違ひます、

以上は先づ致方のないことでありますが、併し衛生上の注意如何に依て、生來不格好な手も美しく保つことが出來、元來美しい手も汚穢く醜くなるものであります。これは兵士に就て見まするど非常によく分かります。何れの聯隊にも今月から新兵が入營致しましたが、皆體格の立派な同年齢の壯丁で、飲食、起居、演習其他總て同じであります。それから時々衛生講話がありまして、特に手足の衛生上の注意は十分與へて居ります。然るにこれから段々寒氣が強くなる、演習も追々激しくなつて參りますと、種種の手が出て來る。大抵毎晩、日夕點呼の喇叭が鳴りまして、各々その斑に於て寢臺の前に整列しました時に手を出させて檢査致します。何れも手の皮膚は堅固になつて居りますが、ある者は普通人の如く奇麗な手をして居り、ある者は皹をきらして粗糙の手をして居り、又ある者は皹の上に、それが不潔になつて黑く、がさ／＼して熊の手か、松毬のやうになつて居ります。總て同一條件の下に生活して、何故斯く異るかと申しますともとより、生來皮膚に強弱があり、體質の差もありまするが、それよりも主として手の衛生に注意するとしないとに、由るのであります、その證據には、手が不潔と云ふて叱られる兵隊さんは、何時でも定つたもので、單に手ばかりではない、萬事にかけて成績が良くない、所謂無精者だとか、ダラシガナイとか云ふて常に叱られる兵隊さんである。別に身體が虚弱な譯でもない、脂氣が少ない譯でもない、人一倍づ抜けた大きな身體をして居つても、手を不潔にして洗はない、洗つてもよく拭かない、拭ても被服に擦りつけて置く位のことで、濡れた手を直接火の上で乾かすと云ふ流儀の兵隊さんに限る。これを以て見まするど、少しく

衛生上の注意をすると、しないとでは、手を美しく保つ上に著しく相違を來すことが極めて明かに見えるのであります。

これは兵隊さんばかりでは御坐いません、女中さんでも左樣で御坐います。いくら水仕事を致しましても、雜巾掛を致しましても、手の始末の宜いものは容易に皹赤切をきらしませんが、少しく無精な者は、これから實にみじめな手になります。卽ち不潔になつた手を、よく洗ひもせずに前掛で擦つて置くと云ふ性質の女中さんは皆これであります。斯樣な性質までが手に現はれるのであります。『汝の手を余に示せ、然らば汝の何人なるかを告げむ』はこゝにも應用することの出來る言葉であります。

女中さんの手は、まだ宜しう御座いますが、こんどは奥樣の手になりますと關係が大分大きくなりまして『この家の主婦の手を余に觀せしめよ、然らば此家庭の如何なる家庭なるかを汝に告げむ』と云ひ得る格になります。瘦細つた貧血性の而かも鉛色に薄黑いやうな手をした奥樣は、經濟の整ふた、少なくとも生氣のある家庭の主婦では御坐いません。矢張精神的にも瘦細つた貧血性の、鉛色の薄暗い家庭の奥樣であらうと思はれます。況や爪の尖の眞黑になつて居るやうな人の司つて居る家庭には、物質的にも精神的にも矢張隅々に眞黑なものが同居してゐる筈であります。

斯樣に申しましたからと云ふて、私は徒らに手を綿にくるんで卵のやうにして置くことを希望するのでは御座いません。人間の手は決して只だ身體の飾物ではない。苟も完全に發達した女の手、若し美と云ふものは、完全と云ふことの中に含まれて居る、少なくともこれに悖らぬものとするならば、又美しき女の手とは、婦人の仕事の範圍に屬する、あらゆる種類の操作に勘能なる手、言換へれば甲斐／＼しき運動と、その技巧とを神經の力にて結付けた所の手をこそ稱すべきものであらうと思ひます。然れば假令粗仕事に依てその手の形は粗大となるとも、こ

れは決して令嬢又は夫人の手さして恥づべき手ではない、掌骨部が惡く長く而かもいやに狭く、その尖端に飛出した、纖弱な、殆どへし折れそうな指を附著して居る手を以て美しき手の理想と見做すべきものではありますまい。實に此の如き手は、これ只懶惰にして無意義の生活に由る纖弱と筋肉衰弱との結果に外ならぬのであります。此の如き手を以て貴族がり、人に誇らんとするものは戯者である。何れの方面に向ても喜んで働き、進んで業を執ねばならぬ吾々のこの時代に於ては、最早斯の如き爲す事も無き寄生蟲の特徴を以て人間の完全なる美と稱することは出來ません、尚ほ美しき手の理想は此の如きものとせらるゝならば、これは眞に國家の不祥事であります。狭く細長い手は、猿の手の特徴であります。然れば美しき手と云ふのは、その形に於ても大さに於ても、徒らに腕の裝飾的附屬物として附著して居る手の謂ではありません、腕の發動機的終器として具へ附けられた手でなければならぬのであります。

西洋のある學者は、希臘の神話に名高い、ニオベさかウエーヌスとか云ふ美しい女神達の手に恰度宜い大きさの手袋の番號は、大抵の今日の貴婦人令嬢方には恐らく赤い顔をして白状しなければならぬ程のものであらうと申しましたが、衣通姫や小野小町も、矢張今日の若い令嬢方には顔を赤らめる程の大きな手袋が必要であつたかも知れません。要するに形や大さは致し方がない、又實際眞の美と云ふ點に於ては、左程苦にすべきことでもない、只衛生に注意して、常に清潔に保ち、あらゆる婦人の手業に就て巧妙に敏捷に操作運動し得るやうに躾けられた手を以て美しき手と稱すべきでありませう。

此稿を了つて筆を擱た本月五日の東京朝日新聞を見ると、新戸邊博士が國華倶樂部で講演された歐米人の日本美術評であると云ふ、その冒頭に恰度左の如き面白い一節が御坐いました。

カリホルニヤなどで葡萄、桃、梨或は小さな果物、トマト、苺のやうなものを採るには日本人

の手に限る、嘗て十年程前に西洋婦人が日本へ來た節、私が日本で何が一番氣に入つたか、櫻の花か箱根の風景かと訊ねたら、それは婦人會であると答へた 或婦人會で何か決議した時幹事が御同意の方は手を擧げて下さいと云つた、すると婦人連が手を擧げた紅い袖の中から白い手が澤山出た、此時の手の美しい事は迚も 私共の國では見られるものではないと其西洋婦人が云つた、日本人の手は餘程綺麗であると見えて、私が外國に居た書生時代にも手が綺麗だと褒められた、或る演說會に行つたら後に居た人が前に居る日本人の手は綺麗だと云つた、この手が卽ち今日大和民族が海外に發展する資本(四本)に代へる五本であることを其時非常に感じた、十七八の女の子がカリホルニヤでは苺の季節には其綺麗な手で一日十六圓の金を儲けるのだ。

これに依て、前に私の述べた所は誤つて居らぬ、寧る適例を得て大に證明されたやうな氣が致しますので、そのまゝ此處に引用附記致しました、卽ち日本婦人の美しき手は、外國に向ての一つの誇である。ます〳〵衞生上の注意を怠らず、子々孫々にこの美しき手を傳へなければなりません。而かも單にその形態膚理の美しいばかりではない、手技の纖巧なる點に於て一層の美を發揮して居るのである。これが卽ち前に私の申上げた眞の美しい婦人の手である。新戸邊博士は『この手が卽ち今日大和民族が海外に發展する資本(四本)に代へる五本である』と洒落られましたが、何卒いたづらに美しい惰弱者の飾裝でなく、日本國民が以て海外に發展する資本たるべき活動的の美しい手を保護し養成したいものであります。

脚氣食物豫防法 (承前)

醫學博士　遠山椿吉

三　糅飯主食

糅飯（かてめし）は雜穀を米に混加し飯となすものの總稱にして、地方に由り其糅料一樣ならず、麥あり、稗あり、玉蜀黍あり、大根あり、乾葉あり、甘藷ありと雖も最も廣く行はるゝは麥なるが如し、故に麥飯を以て糅飯の代表として談ずるを便とす、但し予が脚氣豫防のために奬推するものは單に麥のみにあらず、稗可なり、粟可なり、大豆可なり玉蜀黍可なり、他の雜穀又亦可なりと知るべし。

『麥飯は脚氣豫防に效あり』とは古來一般の傳說なりし、然れども麥飯と名くるもの總て有效なりと思ふは誤りなり、何となれば元來脚氣の發生は前已に述べたる如く、米の銀皮中に存する人體有要の成分を、精搗の爲めに除却したるものを主食とするに由りて起る疾病なるを以て、此成分を失はざる麥（其他雜穀）を以て、米の不足成分を補ひ、健康を維持する事が即ち豫防なればなり。

然るに米にして銀皮成分を甚だしく失はざるものは、麥を假らずして豫防の效はあるべく（既に述べたる玄米、熟米、半搗米之なり）又極度に精白したる米なりせば、少量の麥を混じたりとて白米の不足成分を補ふに足らざるべし、左れば麥飯なりとて豫防の效、米の飯に劣る場合もあらん、米飯なりとて豫防力麥飯に勝る場合もあらん、然るに一既に麥飯は脚氣に效ありと云ふが如きは、俗論の甚しきものと云ふべし。此の理由不明なりし往時には、相當なる醫學者間にも、單に麥飯なるものを捉へて、有效無效を爭論したる時代ありし、今にして之を觀れば、有效無效論者共に要領を得ざりしは寧ろ當然なりし故に糅飯を以て完全に脚氣を豫防せんには、左の法則に從ひ麥と白米との混合量を定めざるべからず。

（一）三級以下の白米（前の所謂精白程度）なるときは、麥の二割乃至三割を混和す、

（二）六級以上の精白米なるときは、麥の五割以上を混和す、

嚴格に言ふときは麥の精白程度をも參酌するの要あ

れども、麥は自然の構成上米の如く精搗の爲めに全然有要成分を失ふことなきを以て、玆には概して平均のものと見做したるなり。

以上第一項より第三項の方法を實行せんこと實に容易の業にあらざるべし、於是予は之が實行奨勵の策として左の要望をなす。

(一)學者及教育家の示教

(二)上流者の示範

(一)世の學者及教育家にして、果して予が説を是信せらるゝ上は、力を極めて『純 米食 の健康保持上に不可なる所以を』一般國民に懇示せられんことを望む、

(二)百の言論は一の實行に如ず、世間中流以上の人、願くは其家庭に雜穀を入れられんことを、中流以上の豫防法は後ちに(第五項)論ずるが如く、必ずしも雜穀食の要なしと雖も、玆に要望する所以のものは、移し難き舊慣を打破せんがために、實際示教として上流者を煩はさんとするものにして、上流者一度範を示す時は、上の好む所下之より甚だしきものあり、雜穀食は粗食として卑しむべきものにあらず、圓滿なる健康を保持するに必要なり、決して經濟上に吝なるためにあらずとの觀念を養ふに最も有力なるべければなり。

四　麵麭主食

麵麭主食の脚氣豫防に效あるは、全然雜穀主食と其意義を同ふす、帝國海軍が兵食を改良して脚氣を全滅したりと云ふは、從來の白米主食の大部に代へて麵麭及麥飯主食となし、且次の第五項に論ずるが如き副食の量を增したるなりしなり、麵麭主食者も大人一人一日白米(上白)として三合以下を並食して豫防上妨げなきこと、純 雜穀食 者と異る所なし、麵麭主食に就て世間の趨勢は全く雜穀食に反し自然增加の實況あり卽ち

(一)中流以上殊に都會に在りては、所謂洋食を攝るもの漸く加るの傾向あり、(麵麭主食と稱趣を異にし、寧ろ第五項に近きものか)

(二)洋食と謂ふに非ざる眞の麪麭主食にして、米飯に代へて麪麭を用ふるものは都鄙一般に漸く加るの傾向あり、東京市芝區西久保巴町鞆繪小學校の兒童辨當百中九・三八は麪麭なりし、長野縣の檢丁の辨當百中二二・二三は食麪麭と餅なりしと云ふ以て見るべし。

都會に於ては、近年脚氣病稍〻減少せるの觀あり、蓋し此食物關係に因由するに非ざるか、今後自然に放任するも、此風潮は漸次に增進すべし、最も嘉みすべき現象なりとす、更に大に之を慫慂せんことを要す。

五　副食增加

副食は主食に對する語にして『サイ』(オカズ、菜、菜肴下飯の謂にして米以外の他の雜穀、蔬菜、肉、卵等なり)のことなり、本項の方法は可成副食を多量に攝り以て米飯量を減ずるものにして、原因論に述べたる如く、全食量中の米食割合少きもの(食量百分中三十以下)脚氣を免るゝの理論に基くものなり、之を詳說すれば食量百分中五十分の米を食ふものは、脚氣に罹るの危險あるを以て、米量を三十分以下になさんが爲めに、二十分を糅料又は麪麭を以て之に代ふるも宜しく、又副食の二十分を增加するも可なり、共に米量を三十分以下に低下するの方法に過ぎず、海軍の兵食改良を以て、脚氣豫防に成功したるもの畢竟亦之に外ならざりしなり。

本項は純雜穀、玄米、熟米、半搗米、糅飯、麪麭等を用ふること能はず白米食をなす場合に採用するものとす、本項の有效なるは原因論の條下に於て、統計の結果を以て說明したれども、更に實際の一二例を擧げて之を證せんに。

(一)個人にして米飯を食ふこと割合に少く、副食を多く攝るもの、言を換ゆれば所謂『オカズ喰ひ』に脚氣に罹るもの少く、予自身は其一例にして靑年學生時代より今日に至るまで、一回も脚氣を覺えたることなし、(但し茲には個人素因なるもの〻存否を顧慮せずして論定

したるなり)

(二)人の發育旺盛にして、最も多量の食物を要求する年齢(十六七年より二十一二年)に當り、家庭と團體生活とを問はず、副食量は他の年齢者と大差なく一定し、或は制限して給與せらるゝを常とす、即ちオカズはあてがひ扶持にして、米飯は否らず故に自然米食の量割合に高度となり、此年齢者は特に脚氣に犯さるゝこと多し、如此人にも年長じ家庭を構成するに至れば、全食量減じ、副食量増すが常とする故に、隨て米食割合に低度となり、自然脚氣に遠ざかるものならん。

此方針に由り、予は脚氣豫防食餌標準及之に則とる獻立例を製し、實行者の參考に供すべし。

此標準は白米は上白を用ゆるものとし、且糅料を用ゐざるものとして調製したるなり、又此標準食量は皆實際の例を採り、其平均に據れるものにして、一等乃至四等を別ちたるは職業勞働の程度、年齢、男女等に依り要求する全食量に差異あるを以て、假りに之を四階級になしたるなり、例之ば鑛山の工夫、航海中の海兵等は一等、中等度の勞働者、壯年の學生等は二等、坐業者、幼年學生等は三等、女工休職囚人等は四等なるが如し。

表中の數字は凡て『匁』なり。

表中『味噌』は汁料にして『汁實料』は味噌汁に入るべき品料、『菜料』は生野菜、乾物、製造食品、獸鳥魚肉、乾肉、卵等の總稱にして『料理品』は鹽、醤油、酢、味噌(汁以外)砂糖、胡麻、油、鰹節、葛粉、温飩粉、芥子、胡椒、生姜等の總稱なり。

(第一表)　脚氣豫防食餌獻立標準表

		汁料(味噌)	汁實料	漬物	菜料	料理品	米	計
一等	朝	二〇	六〇	二〇	—	—	一八三、三三(五合二夕四才)	五四五、三三
	晝	—	—	二五	九〇	二四		
	晩	—	—	二〇	八〇	二四		
二等	朝	一五	四〇	一二	—	—	一三三、三三(三合八夕)	三九六、三三
	晝	—	—	一八	七〇	一八		
	晩	—	—	一二	六〇	一八		
三等	朝	一〇	三〇	一〇	—	—	一〇〇(二合八夕五才)	二九一、〇〇
	晝	—	—	一五	五〇	一三		
	晩	—	—	一〇	四〇	一三		

四等							
朝	八	二〇	八	―	―	六六、六六（一合九夕）	二一〇、六六
晝	―	―	一〇	四〇	一〇		
晩	―	―	八	三〇	一〇		

以上献立標準に據り、一等乃至四等に準ずる實際の献立例を左に示す。

（第二表）脚氣豫防食饌献立例

	米	朝	晝	晩
一等	五合二夕四才（一日）	汁（味噌 二〇　茄子 六〇） 漬物・澤庵 二〇	照燒 鮪 四〇 煮附（油揚 三〇　羊栖菜 三〇） 漬物新漬大根 二五	煮附（款冬 二五　蠶豆 四〇　燒麩 一五） 漬物 澤庵 二〇
二等	三合八夕（一日）	汁（味噌 一五　里芋 四〇） 漬物・澤庵 一二	煮附（豚肉 三〇　燒豆腐 四〇） 漬物・菜漬 一八	胡麻合・新菊 一〇 煮附（牛蒡 三〇　蒟蒻 二〇） 漬物・澤庵 一二
三等	二合八夕五才（一日）	汁（味噌 一〇　豆腐 三〇） 漬物・澤庵 一〇	生卵一個（一個） 煮附（豌豆 一五　里芋 二〇） 漬物新漬大根 一五	煮肴 比目魚 三〇 浸シ・菠薐草 一〇 漬物 澤庵
四等	一合九夕（一日）	汁（味噌 八　葱 二〇） 漬物 澤庵 八	煮附（油揚 二〇　馬鈴薯 三〇） 漬物・菜漬 一〇	煮附（蓮根 一〇　鯡 二〇） 漬物・澤庵 八

此食饌献立例は其一斑を擧げたるに過ぎず、地方に依り季節に依り、適宜取捨斟酌すべきは勿論なりとす、要は唯白米と副食との標準率を超脱せざるにあり。

結論

以上の脚氣豫防法を概括するときは實行者は左の各項の一を撰んで食饌を調ふるにあり。

（一）洋食、純穀食、又は麵麭を主食として白米を食せす。

（二）玄米、熟米又は一二級白米を用ふ。

（三）三級乃至五級白米に雜穀（麥）二割乃至三割を混用す。

（四）六級以上の白米に麥等を混用す。

（五）麵麭又は雜穀（麥）を主食として白米（上白）量を大人一日三合以下に止む。

（六）白米を全食量（副食及糅量共）三分一以下に止む。

此脚氣豫防法は予が一般同胞に推奨するものなれど

も、從來脚氣病に襲はるゝこと多き團體生活をなすもの、卽ち兵營、學校、工場、商社、鑛坑其他の勞働團等の管理者は特に進んで之を採用實行せられんことを望む。

以上は脚氣豫防法中予が所謂主因に對する豫防法なりとす、副因卽ち個人素因、氣候、住居等に對する方法は、一般衞生の法則に據るべきは勿論なりとす。

旣に脚氣に罹れるもの本篇所論の食餌を取るは、所謂原因療法に該り、其效あるべきは信ずるに足る。

近來脚氣白米原因論の世に傳はるや、治療料として米糠又は糠浸汁若くは其エキス等を使用するものあり、理論上其效を認むべしと雖も、治療を論ずるは本篇の主旨にあらざるを以て、此には其總てを言はず。

育兒

子供の罹易い眼病

莊司秋次郎

何人でも、初めて眼科病院の控室に行つて御覧になりまするならば、まぶしさうに下を向いてゐる子供や、手を以て眼を擦るのを、お母樣に制せられてゐる子供、眼脂を顏中に著けて、乳母や子守の背中に眼をショボ／＼させてゐる子供の案外多いのに驚かれるでありませう。實際小兒には眼病の多いものであります。

それはその筈で、元來眼と云ふものは、五感器の中でも最も鋭敏なもので、就中小兒の眼は、總ての刺戟に對して鋭敏であるのに、自分の不養生のみならず、周圍の人々の不養生まで關係して居りますから、

どうしても眼病が多い譯であります。その多い小兒の眼病の中でも、茲には特に危險なる眼病い、最も多い眼病に就てお話を致します。

○○膿漏眼　これは昔から人の恐れた所謂風眼のことでありまして、淋病の毒が眼に入つて起る所の劇烈なる傳染性の眼病で御座いますが、小兒は既に此世に初めて生れ出づるその門出に、往々この恐るべき眼病の危險に遭遇するのであります。卽ち小兒の頭が產道を通過致します際に、粘液や膿汁が、容易に睫毛や眼瞼に附着致しまして、その膿の中に淋病菌がありまするど、小兒の閉ぢてゐる眼瞼の下で以て、程好き濕度の下に速かに增殖して、その結果、彼の恐るべき眼病が起り、速かに適當の治療を施さゞれば忽ちにして一生の盲人となつてしまふのであります。

この膿漏眼に罹りますと、眼の結膜と申しまして、眼瞼の裏と鞏膜、卽ち俗に白眼と云ふ部分を被ふてゐる所の皮から、絕えず淋毒症の膿が澤山出來まして、それが忽ち角膜を侵します。角膜と云ふのは俗に黑眼と申す部分で、彼の鞏膜に恰も時計硝子のやうに嵌つて居る所の一種固有の膜でありまして、その奧の方に虹彩と云ふ色のある膜が御座いますので、黑く見えますけれども、全く透明なものであります　これが硝子の如く透通ればこそ物がよく視えるのでありますが、この角膜が曇れば、紙を一枚隔てゝ物を視るやうに萬物たゞ泮平として微かに視えるに過ぎません。若しこの角膜に膿をもつて、卽ち潰瘍を生じて頽廢ることになりまするど、その部分はどうしても瘢痕に依て塡められることになります。瘢痕と云へば疱瘡の後の痘瘡の如きもので、決して本の角膜ではない、煮た魚の眼球のやうに白くなつて、透通つたものではなくなつて仕舞ひます。而してまゝこの潰瘍が、角膜の裏まで全層を侵しますと、こゝに角膜は破れて、その陰に在る所の水晶體が洞濁て參ります。この水晶體と云ふものも、水晶の如く透通るので物が視えるのでありますが、

れが曇り或は濁つては物が視えなくなる。斯うなれば眼球は萎縮で、最早如何とも致し方がなくなつて仕舞ひます。且つこの水晶體は小さいもので、特に小兒に於ては軟かいものでありますから、角膜の破れた所から外に飛出すことがある。殊に習れない人の手で以て、斯様な眼を洗ふ際には、屢々かう云ふことが起ります。即ち俗に眼が飛出したとか、佛様が流れたなど〻申しますが、斯うなれば、その部分に小豆粒のやうな芽を出して固まつて仕舞ひますが、更に甚しくなれば眼球全體が腫れて痛んで化膿で潰れて仕舞ひます。要するに、膿漏眼は、初生兒の病眼中最も危險なるものでありまして、現在失明者の五割位は、この眼病の爲めに盲になつたものであると云ふ事實に見ても明かなことであります。然れば近年に至つて、これが三割程に減つたと云ふことは、既に一大進歩と云はなければなりません。この進歩は、全く有名な獨逸の產科醫クレーデと云ふ人の御陰であります。即ち大病院になりますと、一人の看護者が十人も二十人も產婦を取扱はねばならず、初生兒の數は一層多いと云ふやうな譯で、それに當時は未だ今日の如く防腐とか消毒と云ふ觀念が薄かつたものでありますから、種々の傳染が起る。それでこのクレーデ先生の產科部に於ても頻々初生兒の膿漏眼があつて困つた。そこで種々研究工夫の末、終に千八百八十年に至て一の名案が出來た。それは、初生兒が生れると直ちに二%の硝酸銀溶液を二滴程點眼することで、この極めて簡單な方法で以て、眼に這入つた淋毒菌を確實に殺して無害にすることが出來、先生の產科病室からは、彼の恐るべき初生兒の眼病は頓に一掃せられたのであります。所が茲に一つ注意すべきことは、初め先生の助手が行つた間はよかつたが、これならば誰が行つても大丈夫であると云ふて、習れない人に任した所が、矢張又屢々この病人が起つたと云ふことであります。これを以て見れば、斯様な極めて簡單な小手技も、十分心得た理の解つた人でなければ完全に行かないも

のと見えます。今日では一%の硝酸銀水一滴で以て、この目的を達し得ることが解かりました。それで現今に於きましては、我邦の產婆も必ずこの法を行ふやうになりましたが、何うかすると、私の小兒には左樣な穢らはしい淋病の毒などが眼に這入る理由がないから、止めてもらはうなどゝ怒る人があると云ふことを聞きましたが、これは甚だ誤つた考であります。何故なれば膿漏眼は、必ずしも淋毒のみに由るとは限らない、產婦の白帶下の多い時などには、矢張初生兒に膿漏眼が起り易いものでありますから、確かに淋毒が無くとも、この法を行つて豫防しなければならぬのであります。

次には、一回この豫防を行つたから、もう決して膿漏眼に罹る氣遣はないと云ふて、惡く安心する人もありますがこれ亦誤つて居る。なる程一回のクレーデ法で以て確かに豫防は出來ますが、母親その他の人に淋病があつて、その毒の附著した手や手拭の如きものを以て、小兒の眼をいぢれば、再び新に傳染させるから、矢張又起るのであります。所謂遲期傳染で、かう云ふ場合には、生れてから二週間或は尙ほ後に至て發します。併し定型的の初生兒眼炎と云ふものは、通常一週間以內特に二日乃至五日の間に起るものでありまして、小兒の眼瞼は腫れて、赤く熱くなり或は甚しく膿汁が出て來る。斯う云ふ場合には直ちに醫師、殊に眼科專門の醫師を招かなければなりません。若し產婆が一回豫防法を行つてくれたのだから、膿漏眼ではないなどゝ云ふて、宜い加減のことを行つて居りますと、案外取返しのつかぬやうな哀れなことになります。私も實際斯の如き例に遭遇したことがありますので、特に御注意を申上げて置きます。

併しこの恐るべき眼病も、早くさへ治療を施せば、全く治癒る。縱令二三日遲れて、既に黑眼に傷が出來ましても、適當の治療を施せば、僅かに雲を殘す位で、四週間乃至六週間位で全治するものでありますから、兎に角生れて一週間以內の小兒に眼病が起

つたならば、素人診斷は見合はせて、直ちに醫師を招くやうに致されたいものであります。

膿漏眼は初生兒の罹り易い、急性の危險なる眼病で、適當の時期に適當の治療を施せば、比較的速かに全治する眼だけの病氣でありますが、これとは反對に、稍や生長した小兒の罹り易い、慢性の眼病で、手を盡しても、なか〳〵頑固に抵抗する所の身體の內から來る所の眼病が御座います。即ち腺病性の小兒に來る所の眼病であります。

腺病性と申しますのは、頸が細く、顏面は蒼白く稍やむくんでゐるやうで、皮膚は軟かく、頰が少し赤く、皮膚には種々の發疹が出來、頸にグリ〳〵が出來ると云ふやうな小兒で御座いますが、これは小兒の結核であると云ふ說がありまして、小學兒童には非常に多い。實際人間の三分一は小兒時代に結核を經過するものだと云ふことでありますから、或はさうかとも思はれますが、併しこれには種々の議論が御座いまして、今日では腺病と云ふ病名は、醫學社會では殆ど俗名のやうに見做されまして、たゞ便宜上廣い意味で、一種の體質病を稱することになつて居りまして、一定の病原物も確定せられませんが、兎に角一種の血液中毒或は血液傳染と見做すべきこのでありませう。どうもさうでなければ、恰度彼の黴毒の如く身體の種々の器官を同時に侵し、或は長い間反復して起ることが解りません、又榮養の惡い、抵抗力の弱い小兒に好んで發する譯が解りません。

それで經驗上腺病の最初の徵候は、麻疹の如き急性傳染の後に現はれることが多い。これは畢竟小兒の血液が、麻疹の毒に對して、その血液の中に澤山含むで居る所の防禦物質を使ひ盡すので、新に侵入して來るものに對しては最早禦ぎ切れなくなつて種種の病症を發して來るものと思はれます。故に往々麻疹が直接腺病性疾患の原因の如くに思はるゝことが御座います。

腺病は、どうしても生活狀態の不良な家の小兒に多い。特に兩親の虛弱な場合に多く、又濕氣が多く、

日當の惡い、風通しの惡い家で、榮養も不十分な小兒に多い。併し金持の家の小兒も腺病を免れるとは申されません。但し榮養、住居、其他氣候等に注意するならば、この病氣を禦ぎ又恢復せしむることは困難でありません。

腺病性の小兒は、大體前に述べたやうな體質のものでありまして、皮膚に種々の形の濕疹が出來き易い、特に顏面や頭部、又鼻孔や耳の邊に出來て哀れな有樣になることがある。それから顎の下や頸の周の腺が腫れて、甚しいのは頭が直接胸に著いて居るかと思はれるやうな格好になり、この腺の腫脹は、往々實際結核性のものとなつて化膿し、外科の手術を要するやうになるものであります。

慢性の咽喉加答兒、氣管枝加答兒、又胃加答兒の如きものも、この腺病の症候と見做すべき場合があり、慢性の中耳炎なども、これが原因となつて居ることが少くないのでありますが、此等の器官の病氣よりも更に一層多いのは、腺病性の小兒の眼病であります。

これは實に種々に現はれて參りますが、先づ外側の方から申しますと、眼瞼緣炎、即ち眼瞼の緣の所が爛れて、ぐしや／＼して不潔になり、朝目を醒しますと、睫毛が粘著いて眼が開かない、而して小兒は常に眼をぱち／＼し或は手を以て擦りますので、ます／＼惡くする。これは治療しますれば比較的早く治るものでありますが、打棄て置いては容易に治りません。長くかうなつて居りますと、假令全治致しましても、多少眼相を惡くする、特に潰瘍性の眼瞼緣炎と申しまして、睫毛の根本の處を圍く腐らす性質のものになりますると、睫毛が脫落て再び生えなくなる、或は細い元氣のない睫毛が生えるばかりであります、それで小兒期にこれを煩ひますと、生長して晴天の美人となつても、惜いかな、僅かに睫毛が所々無いとか、不揃だとか云ふだけで著しく美貌を損ずるものであります。

次には一步内に進んで、結膜に起る所の腺病性の

病氣でありますが、濾胞性結膜炎と申しまして、主として下眼瞼の裏の結膜に、粒々が出來、往々眼脂が多く出る一種の眼病があります。これはトラホームなどゝ云ふものゝ如く、餘り性質の惡いものでは御座いませんけれども、治さうとしてもなか〳〵頑固で、よし忽ち治癒つても、又忽ち再發する。つまりこれは腺病、少なくとも腺病を發し易い條件の下に在る小兒に多いのであります。腺病性の眼病は何れも再發し易いものであります。

それから水泡性結膜炎、又は濕疹性結膜炎などゝ稱しまして、白眼と黒眼の境の所に粟粒或は麻實程の大きさのものが、一つ或は數個出來まして、眼が赤くなることがある、これは特に腺病性結膜炎と云ふ名さへある位で、全く腺病性の小兒に多いので御座います。普通黒眼と白眼との境に止まつて居りますれば、大抵一二週間の治療で治癒ますが、これが幾個も出來て、恰も珠數の如く黒眼の周圍を取卷き、或は黒眼の領分に侵入して參りますと、なか〳〵烈しい勢を呈して來ることがあつて、小兒は羞明がり、眼球は眞赤になつて、眼脂も多くなり、まゝ角膜を破るやうな危險も御座います。斯樣な場合は勿論稀でありますけれども矢張幾度も再發するので困るものであります。

更に進んで腺病性角膜炎と云ふものになりますと、黒眼の眞中或は少しく白眼の方に寄つて一個或は數個の小さな白い星が出來て、その尾に血管を引き、ごろ〳〵して眼に物の入つてゐるやうな感じがする。而してその星が碎ける時には疼痛が起りますから、小兒は羞明しいやら痛いやら、涙も流れるので、眼を固く閉ぢて下に俯向いて顏をえ上げなくなります。而して其の結果、その部分に雲を殘し、或は傷が深く大きくなつて角膜が破れると云ふやうなことになれば、それが爲めに失明するにも立到りますから、これは決して馬鹿にならぬ眼病であります。而して一旦治癒つても矢張再發し易い。

斯の如く腺病性の眼病は、種々樣々の形を以て現は

れ、且つ再發し易いものでありますから、どうしても身體の方から十分治療を施さなければなりません。それには、此の如き小兒は努めて榮養を良くし、なるべく新鮮の空氣の中に置き、特に海水浴或はゾール浴を行はしめて大に效があるのであります。

以上二種の眼病が、小兒の最も罹り易い、又最も危險のものでありまして、この他に尚ほトラホームと云ふものも非常に小兒に多いものでありますが、これには小學校などでも大變やかましく申しますので、既に何人も御承知のことゝ存じますから略します。只トラホームは非常に治癒し難い傳染性の眼病で、多くは慢性に經過し、種々の合併症或は繼發症を起し易いもので、特に我邦には甚しく蔓延して居る厄介なる眼病である。併し適當の治療法を施せば、小兒のトラホームは、比較的よく全治するものであると云ふことだけを申上げて置きます。

もう一つ玆に申上げたいのは、乾燥眼と云ふ眼病であります。これは俗に疳眼或は雀目と申しまして、矢張榮養の不良い小兒、又衰弱した小兒に起る所の眼病で御座いまして、白眼の光澤が惡くなり、所々礬水紙を揉むだやうに白く光る所が出來、特に黑眼の外側の部分、即ち外眥に近い部分は、甚しくなれば、恰も豆腐の滓でも附著してゐるやうに見え、小兒は晝の明い處では羞明がり、暮方になると物が視えなくなつて、遊べなくなります、これが一歩進めば、角膜乾燥症或は軟化症と申しまして、黑眼が一體に曇り、更に進めば角膜破れて遂に失明するに至ります。併しこの病氣は、早く治療を加へれば容易に全治するもので、輕きは二三日で不思議な程良くなるものであります。これには肝油の內服が最も效がある。尚ほ凡て脂肪に富むだものが宜いのでありますが、眼病には昔から淡泊な食物を撰むことが多いので、往々この症にも特に脂肪に乏しいものを與へて、ます〳〵重くすることがありますから、氣をつけねばなりません。

尚ほ眼の外傷もなか〳〵小兒に多い、總て小兒の怪

我は兩親の責任であるが、單に怪我のみではない、前に述べた諸種の眼病も、少しく兩親の注意が行屆けば、大抵豫防することが出來る、少なくとも我が兒を盲人とするやうなことはあるまいと思ひます。

病兒看護の要領（承前）

。。早産　もと〳〵病氣と云ふ譯ではないが、早産は兎に角正常のものではない、從てその看護法も重病の看護と同じやうであります。

早産兒と申しますのは、妊娠二十八週乃至三十九週の間に生れた兒を云ふものでありまして、唯だ萬事都合の良い、幸運の場合にのみ生存することが出來るもので、母胎に長く居つたゞけ都合が宜い理であります、生れた時の體重千五百瓦以下の小兒はあらゆる手段を盡しても往々死ぬるものでありますが、併し千瓦以下、しかのみならず七百瓦以下の初生兒でさへ生存せしめ得た例が御座います。何にしても苟くも人間の形を具へ、生命の徴を現はす所のものの爲めに全力を盡すと云ふことは、啻に看護者の義務たるのみならず、又實に榮譽とすべきことであります。而してその骨折甲斐があつて、幸に一人の小兒を此世に引止め得たとすれば、確かに看護法その宜しきを得たものとして誇るに足るのであります。

この看護の要點とする所は、絶えず温かに保つことにあるのでありまして、産科又は小兒科病院には、この目的の爲めに構造された種々の暖氣槽、即ちクベーズと云ふものが用ひられます。この暖氣槽の缺點或は不利とも云ふべきことは、絶えず新鮮の空氣を入れ難いことでありまして、その爲めに頻回換氣法を行はなければならぬ、即ち度々空氣を入換へなければなりません。而してこの際烈しく風を入れたり、又は冷却したりすることのないやうに十分注意することが肝要であります。それ故斯樣な小兒は、特別に醫師の處方に由るにあらずんば、妄に湯をつかはせることも出來ません、先づたゞ拭て置くので

あります。それもなるべく暖氣槽の内で致します。併し無論又屢々外に出さなければならぬ。卽ち生活機能(啼泣)を高める爲めに必要なことであります。併しこれは暖かいフランチル或は綿にくるむで出すのであります。暖氣槽の溫度は大約攝氏の二十六度乃至三十度位に處方せられて居ります。若し暖氣槽の設が無い場合には、仕方がありませんから、その時には、豫め溫めて置た綿に小兒をくるみ、度々交換し、且つその傍に湯タンポを置くのであります。

養ふのは又なか〱骨が折れる、餘程忍耐を要することでありまして、早產兒は、初は哺乳することすら出來ませんから、一定の時間通り、夜中と雖も度度匙を以て乳を口に入れてやらねばなりません、早產兒と云ふものは又大變眠るもので、往々殆ど目を覺まさないものがあります。それて乳をやります前には、失神して居る人に霧を吹かけるやうに、屢々冷水を吹かけて、啼き出したならば直ぐその後で榮養物を與へると云ふやうにしなければならぬものがあります。

又呼吸にも力が無い、而して時々口唇や顏面が紫色になつて參ります。その時には胸と背中を平手で輕く打ち、又場合に依ては冷水を灌ぎかけて、この危險を救はなければなりません。斯樣な譯でありますから、早產兒の看護は少しも油斷が出來ません、絕えず此等の狀態に注意してゐることが必要であります。

特に種々の傳染病、鼻感冒、咳嗽の如きも甚だ危險じ、此等のことを防ぐことが出來なければ、遂に死に歸するのであります。

(以下次號)

家庭衛生

養老の注意

醫學士　志田義三

昔、孔子様の御弟子の子游と云ふ御方が、孝と云ふことに就て尋ねられました所が、孔子様は『今の孝は、これ能く養ふを謂ふ、犬馬に至るまで、皆能く養ふことあり、敬せずんば、何を以てか別たん乎』と仰せられました。

誠に尤な次第で、幾程能く養ふたからと云ふて、少しも敬ふ心持が無ければ、矢張犬猫同然の取扱ひになる理でありまするが、然ればと云ふて、又幾程敬する心持であつても、養ふことをしない、或は養ひ方が誤つてゐては、敬が敬にならぬ、却て不敬になるやうなことも御座います。能く敬し能く養ふには、何うしても老人の生理を大體考へて置かねばなるまいと思はれます。依て茲には詳細のことは、とても述べ兼ねまするが、極々大體の注意を申し上げて、老親に事へらるゝ方々の御參考に供し度いと存じます。

先づ老人と申しますと、若い者とは總ての點に於て異りまして、誰が見ても老人に相違ない變化が認められます。此等の變化は、何うして起るかと申しますと、なか／＼說明の出來ない點も御座いまするが、要するに、第一には發育そのものに伴ふ所の身體組織の變化である。第二には若い時分に被むた微細の組織や器官の障碍が後に遺り、積り積つて病態となり或は同じ病氣が再發し易いこと。第三には器械が用ひ耗らさるゝと同様に、人の身體も補ひがつかなくなつて消耗される。此等の事共が寄合ふて、老態を現はし、精神もこれに準じて老人特有の氣風になるものと思はれます。

それでは老衰を防ぎ、何時までも老人にならぬ工夫はないものかと申しますと、先づ差當り無いと云はねばなりません。併し讀者諸君は恐らく度々御聞になつたとかとも存じますが、彼の有名なメッチニコッフ先生が、老衰を防ぐことは出來る筈であると云はれました。それは何う云ふ理かと申しますと、老人性の變化と云ふものは、身體を構成して居る所の貴要の原素、即ち種々の組織細胞と喰細胞との戰爭

に由るものであつて、組織細胞は弱り、喰細胞は強くなり、漸次喰細胞が攻勢を取つて、中樞神經系の細胞までも喰ひ盡すやうになる、その爲めに老衰の現象が現はれて來るのである。故に總ての貴要なる組織細胞に加勢して、その抵抗力を强め、喰細胞に負けぬやうにすれば、決して老衰はしない筈であると云ふ議論で御座います。而してこの説を本として老衰豫防の血清まで發明された位で御座いますが、どうもまだ餘り實行する熱心家もない模様であります。

併し今日は長命法を說く積りでは御座いませんから、それは先づそれだけのお話と致しまして、兎に角人は老衰する。老衰と云ふのも多少語弊があるかも知りませんが、年寄になる。そこでたゞなるべく年寄にならぬやうに、既に老人性の變化が現はれ、病的の狀態を呈して來たならば如何に取扱ふべきかと云ふことに就て少しく述べて見たいと思ふのであります。

先づ第一に心理上の注意を申上げなければなりませんが、職務或は職業と云ふものゝ人間に及ぼしてゐる影響は實に著しいものでありまして、その職業に依て種々に精神が働いて居ります。義務心、名譽心、その他の感情、習慣、事物の利害關係等が精神を鼓舞し奮勵せしめて居るのでありますが、年を取つて今迄の職務職業を廢し、樂にならうと致しますと急に老込むものであります。それで若い夫婦などが孝行をしやうと思ふて、その父母の今迄執つて居つた勤めを悉く止めさせて、暖い衣服を著せ、好きな飲食物を供し、只坐蒲團の上に載せ或は火燵の内に入れて、所謂全く樂隱居にして、親の壽命長久を祈りますと、その結果は反對に、急に老衰の徴候を呈して來るのが常である。こゝが即ち前に申した通り、孝は養ふのみでは行かぬ、敬を主として能く養ふの道を知らなければならぬと云ふ理由であります。

それで年を取つて退職し、或は今迄の仕事を止めやうとする時には、更に新しい輕易な仕事を見付ける

か、少くとも多少身心を使はなければならぬ娯樂、例へば園藝の如き事をやるのがよろしい、特に戸外で仕事する事がよろしい、若しそれが出來なければ、旅行をする事が大に有效であります、即ち之に依て生活の單調を破りますから大變によろしいのであります。但し富士登山と言ふやうな事は止めなければなりません。又老人はどうかすると沈鬱になりがちの者でありますから、之を破るやうにしなければなりません。

何時でもと云ふ譯ではありませんが、不眠と云ふ事が精神狀態に關係致しまして、老人は睡眠が長く續かぬ事が多いものでありまして、此不眠は多くは精神的の努力の缺乏に依るのであります、斯う云ふやうな人は遲く牀に著く方がよく眠れるものであります。晩殊に寐る直ぐ前に、凡て興奮するやうな仕事をしてはなりません、讀み物は仲氣なものは差支ない、それも急いで讀まず、成べく緩くり讀むやうに致し、餘りむづかしくない外國語の書物などは殊に適當であります。又少量の牛乳をゆつくり飲む、或は林檎をゆつくり食べる、と云ふやうなこともよろしいものであります。

其他種々の事に依つて睡眠を妨げられますが、殊に牀に就て少し暖かくなつた時に、皮膚が痒くなる、之が非常に眠りを妨げるものであります、此の場合こは寐る少し前に其部分に、グリセリンを塗りこんで效があるものであります、又度々小用に起きるとか、足の冷える事も睡眠を妨げる原因であります。夕飯を餘り遲く、又多量に攝る事はよろしくない、六時後に少し多量に食事をすれば、既に睡眠を不安にするものであります。

茶や煙草の作用に就ては誰も知つて居る事でありますが、酒類も成る程睡眠を促す效能はありますが、其代りに早く目が覺めるので、老人には困ります、又老人は一週間も、定まつて酒類を用ゐますと、極少量でも眠りが惡くなりまして、朝に飲んでも晩に飲んでも同樣であります。

睡眠劑と致しましては、ブロームカリウム、即ち俗に臭剝と云ふ薬りが大變よく利く事があります。一日に二瓦か三瓦位まで用ゆれば、別に害は御座いません、其他の睡眠薬は、老人には不確實であります。モルヒ子類は禁物であります

寢室及び寢牀は、特に注意すべきは勿論でありますが兎に角老人は若い者よりも暖かに仕なければならぬと云ふ事は忘れてはなりませぬ。（以下次號）

强壯滋養劑に就て（承前）

ドクトル　パウル、クロー子ル

蛋白含有滋養劑

これは小兒、殊に幼兒に就て觀察して見るのが早解かりである、即ち幼兒には、これは效がありそうだとか、無さそうだとか云ふ暗示作用の影響を蒙むることがないから成績は明瞭であります。

薄めた牛乳を以て養はれてゐる哺乳兒が、下痢を起す又嘔吐すると云ふやうな場合には、大抵普通慣用の茶劑或は葛湯などを以て療法を試みる、而てそれが奏效致しませんと、小兒は漸次瘦る、詳しく云へば、小兒は自分の身體の蛋白質と脂肪とを食ふことになつて、食物攝取に由てこれを補ふの力がなくなるのであります。そこで危險を免れる爲めに、特に身體の蛋白成分を增し、或は少なくとも更に減ずるのを防ぐ方法を講じなければならぬ。依て一定の作用の下に蛋白になり行く所の脂肪或は砂糖の如きものを與へる。さうすると、ます／＼狀態が惡くなる、即ち此等の榮養物質は、一層甚だしく腸を刺戟するからであります。こゝに於て蛋白乳を用ゐる、即ち牛乳の蛋白を多量に含み、而かも脂肪や含水炭素を含まぬものを用うる、斯くして腸を害せずして窒素含有物を十分に與へ、傍サッカリン（砂糖は不可）を以て甘味をつけた茶を與へる。さうするさ、便通が正常になりまするさ、忽ち體重の減少は止むのみならず、又元の通りに增して參ります。それで斯樣な

場合には前の二種の榮養物は與へることは出來ません、第三の濃縮したものを與へて身體の衰へ行くのを防ぐ事が出來ると云ふ譯であります。

更に成長したる小兒或は成人が胃腸の疾患に依つて、衰弱して身體の蛋白需用を補はなければならぬとか、又通常の肉類或は、卵の如き蛋白性の食物に堪えないとか、又は食欲が無くなつて、凡ての食物に對してむかづき、或は含水炭素を與へてはいけない、(例へば糖尿病)とか、脂肪を與へることが出來ない(例へば肝臟病)とか云ふやうな場合には、矢張り同じやうな關係でありまして、凡てこれらの場合には出來るだけ蛋白を濃縮したかたちにして、成るべく飲みやすいやうに仕なければなりません。この爲に或は動物性或は植物性の蛋白質を多量に含むで居つて然かも其内の或る物は、既に半ば消化せられた狀態になつて居るやうな製劑が澤山出來て居ります。

肉の代用になるやうな蛋白製劑には、「ワレンチンミートチヴイス」、ケンメリヒ、リービヒの肉「エキス」「ツリード」などゝ云ふ肉の榨り汁から液狀或は糜粥狀に製したものがあります、粉末にしたものには、「シツコーゼ」「ソマトーゼ」などゝ云ふ製劑が出來て居り、魚から製した肉粉には、「リバ」と云ふものがあります。殊に消化のよいのはリービヒ及びケンメリヒの「ペプトーン」、「ヌトローゼ」「アントワイレルアルブモーゼ」等でありまして、他の製劑は一部分動物性の蛋白を含むで居ります、即ち「サナトーゲン」と云ふやうなもの、植物性の蛋白を含むで居るものでは、「ロボラート」及び「ロボリン」。兩方を含むで居るものには、「トロポン」と云ふやうなものがあります。

この肉汁及び肉「エキス」は蛋白質そのものよりも、肉の抽出物及び鹽類がよく作用するのでありまして、つまり、これが大變香ひがよく、又味ひがよいので食欲を亢進し、全身に元氣をつけるからであります。

これは肉乾汁、又は肉茶も同様の效能でありますが、それよりも蛋白質を多く含み、且つ冷めたいまゝで與へると云ふ便宜があります、それで唯僅に液體或は粥の如き食物を食べられるばかりで、他のものは何にも食べたくないと云ふ病人に調法であります。植物性の蛋白製劑はどうかしますと、一種不快の味はひをもつ事がありまして、殊に小兒が嫌ふことがあります、それで近頃は苺とレモンの味のついてをる「サナトーゲン」が出來ました。

而し榮養全部を、これらの蛋白製劑に依つて、補ひ得るものと思ふては間違ひである。又これのみに依つて、體重を増し得るものと信ずる譯にはまゐりません。これらが身體の消失した蛋白を十分補へば、其餘分のものは、不用となつて外にだされて仕舞うものでありますから、幾ら多量に蛋白を含むで居る製劑でも、それが悉く身體の役に立つ譯ではありません。それでこれらの製劑の應用は往々間違て居り、亦全く無益な事があります。普通の食物に依つて、十分蛋白が攝取されゝば、蛋白製劑を用ゐたからと云ふて、少しも身體の足しになるものではありません。

（以下次號）

看法護（承前）

五、處方の實施

（イ）藥の與へ方

藥劑師は、藥に間違のないやうに十分注意する責任を有つて居りまして、單に藥劑そのものゝみならず、罎や袋にも念を入れて居ります。例へば内服藥の罎は圓筒狀で滑澤なるもの、外用藥は六角で縱線のついてゐる罎とし、内服には白い紙の標紙を用ひ、外用には赤い紙を用ひると云ふ風にして間違を防いで居ります。

藥は醫師の指圖の通り嚴重に時間を違へず與へなければなりません。但し食前食後を指定してない場合には、食事の直ぐ前又は直ぐ後には與へぬ方が宜

しい。又患者の眠つて居る場合には、醫師から特別に言付けられて居る時に限り、呼起して藥を與へます。

患者に依ては、味の惡い藥になりますと、飲む振をして、看護婦の目を盜んで吐出すものがありますから、斯樣な患者に對しては、藥を與へた後で話かけるか或は更に少しく水を飲ませるのが宜しい。

水藥は十五瓦程の食匙、十瓦程の小兒匙或は五瓦までの茶匙を以て與へます。酸性の藥は銀製の匙を用ひますと匙が黑くなりますから硝子製の藥飲か陶器の盃を用ひなければなりません。

滴劑で處方されました時には、特別に出來て居る滴劑罎を用ひて精密に算へて與ふるのが最も宜い、而して揮發を防ぐ爲に直ぐ罎の口を閉ぢて置きます。

丸藥又は錠劑を與へます時には、患者の舌の上に載せ、水を以て嚥下せる、膠囊の時も同樣に致します。

散藥は一服づゝ紙に分けて包むであるか或は紙箱に入れてありますから、これを舌の上に振つて、水で飲み込み或は水に溶かして飲ませます、(但し指を以て攪拌ぬやうに)。倘ほ一つ注意すべきことは、散藥を口に入れる時に、むせることがあつて、患者を苦しますやうなことがありますから、前に少しく水を與へて咽頭を潤して置いて與へるのが宜しい。

餘り毒性のない藥は、一包にして、これを幾回に分けて服用せよと處方することもあります、その時には大抵目分量で、半分に分け或は四半分に分けて與へます。

箱や小さな罐に入れてある散藥は、一茶匙づゝとか一刀尖づゝなどゝ處方されることがあります。一刀尖と云ふのは、大約茶匙の半分程であります。味の惡い散藥はオブラートに包むで與へます。即ち皿の上に置いて、少して水を以て濕し、其上に藥をおけて四方から包むやうにし、それを舌の上に載せて水で直接胃まで流し込むやうに嚥むでやるのであります。

次に下劑として蓖麻子油、即ちリチネ油が屢ゝ處方

されますが、これはそのまゝでは、なか〳〵飲にくいものである。その時には、濃い茶或は咖啡、麥酒、ブイヨン、薄荷茶などに浮して、一息に飲むが宜しい、又この時には鼻を被ふて飲み、直ぐ口を拭くやうにすると嘔氣を催すやうなことがない。これと同様に肝油も飲にくひものである。小兒はその上に砂糖を振かけてやると大抵よく飲むものであります。

茶劑は、土瓶の如きものに一茶匙程入れて、五分乃至十分間浸き、これを細かい絹篩或は清潔な麻布で漉して與へます。

（ロ）點眼、點耳

目藥を點眼するには、左手の二本指を以て上下の眼瞼を開くやうにし、必要だけの滴數を點眼罎から結膜囊、即ち眼瞼と眼球の間の嚢のやうになつて居る所にさせば宜しい、而して患者は少しく瞬をすれば藥は全體に眼に行渡ります。

點眼罎には尖端の細くなつて居る硝子管の他の端にゴムの附いてゐるピペットがありまして、そのゴムの所を押して、放せば藥を吸込み、又これを壓せば藥が尖端から出るやうになつて居ります。

耳の内に藥をさします時には、耳朶を少し後上方に牽いて滴します。點耳藥の入つて居る罎は、用ひる前に暫時湯の中に入れて温めて用うるやうに致します。而して耳にはその後で綿の栓を施して置く。

（ハ）含嗽

含嗽劑或は咽雷劑は、口腔及び咽頭疾患に際して處方せらるゝものでありまして、患者は一口藥を含むで、頭を少しく反らして、なるべく咽頭の奥の方で運動させ、嚥下まぬやうに注意して吐出すのであります。これも大抵微温にして用ひた方が宜しい。所で含嗽では案外扁桃腺や咽頭の周壁が洗はれないものであります。それで含嗽も全く患者任せにしては、餘り效がない、殊に小兒に於ては、自分任せにすることが出來ませんので、近來は、大切な場合には、含嗽よりも直接に咽頭の惡い部分に藥液を塗布する方が宜しいと云ふことになつて居ります。併し口腔

や咽頭から剝離れた不潔物や黴菌を外に出すには矢張含嗽が必要であります。小兒が含嗽することの出來るやうに習らすことは一寸困難で、餘り幼い兒には全く出來ません。口を拭くとか咽頭に藥を塗るより外に致方がありません。

含嗽劑としては、鹽素酸カリウム即ち俗に鹽剝と云ふものが最も多く用ひられる藥でありますが、これは決して濫に用うべき藥ではありません。なか〳〵毒性の強いもので、特に小兒に於ては、不注意に含嗽する間に、少しく嚥下ましても、その爲めに腎臟を惡くすることがあり、婦人などの薄弱な人では、刺戟の爲めに却て咽頭を惡くするやうなこともあります。それで縱令成人であつても、これを粉のまゝで手渡しゝてはなりません、何時も三プロセント位の溶液として與へ、小兒には水を以て尚ほその半分位に稀釋めて含嗽させるのであります。これよりも害が少なく同樣に效能のあるのは醋酸礬土水（コップ一杯の水に一食匙）でありますが、三プロセントの硼酸水でも宜しい。尚ほ小兒などには口に含むで居れば自然に溶けるやうに出來て居るフォルマミン錠或はペルゲノール錠などゝ云ふものもあります。これは過酸化水素を含むで居つて、別に害はなく、小兒の扁桃腺炎などの時に半時間乃至一時間毎に與へて宜しいと云ふことであります。

（二）吸入藥

液體の藥は、普通の吸入器で吸入せしめるのが一番宜しいが、只吸入器の蒸氣罐に湯を一杯に入れて破裂した例があり、罐の栓が蒸氣の力で飛出して湯で以て火傷した例もあり、未だ蒸氣が出ないで、二三回湯のまゝ吹出す時に顏を差出して小兒を泣かすやうなことがあるから、注意しなければなりません。テルペンチン油、オイカリプッース油の如き揮發性の油を吸入せしめる時には、これをハンカチーフ或は手の掌に灑いで吸入せしめて宜しい。併し熱湯に注いでその蒸氣を口で吸入し或は漏斗に依て吸入すれば更に有效であります。尚ほこの蒸氣を集める爲

めに、大きな風呂敷のやうなものを頭から被ぶて吸入すれば更に妙である。

（以下次號）

雜報



○東京府の看護婦試驗

去月十九日より三日間府廳內に擧行せられたる看護婦學說試驗は左の如くなりしが、受驗者百五十九名中四十二名合格したり、その實地試驗は本月擧行せられたる筈なり。

一、負傷者ノ看護ニ就テ記セヨ
二、心動及脈搏ノ檢定法
三、腹腔內ニ於ケル臟器ノ名稱及其ノ機能
四、頭部ヲ構成スル骨ノ名稱及頭部ニ存スル孔ノ名稱
五、虎列拉病ノ傳染經路及其ノ死體ノ處置
六、消毒藥ノ名稱及其ノ應用

○桐生裁縫學校の衞生講習

近來衞生思想の普及を目的として各府縣共に或は講話會、展覽會又は幻燈會等を催し大にこれが啓發に努めつゝあるが、今回群馬縣に於ては、特に家庭衞生思想普及の目的を以て、同縣山田郡桐生町に於て私立桐生裁縫學校女生徒百餘名に對し、簡易なる衞生講習會を開催し、一般生理衞生の概念を了知せしめ、是等の女子に依て家庭に衞生思想を注入せしむるの方法を講じたるに、其の成績大に見るべきものありと、而して其の講習科目は、解剖生理大要、衞生一般、傳染病（傳染病概論、傳染病豫防消毒法、傳染病學各論、創傷傳染病）、救急處置、治療介輔、繃帶術、看護法（一般看護法、各種看護法、產褥看護法）小兒看護法、病者飲食物調理法及び用法）等にして、講習時間は每日二時間乃至四時間とし總計四十六時間を費して之を終了したるが、講師には同町の開業醫十五名及び縣警察醫一名協力して之に當り、各講名は其の分擔せる科目に就き可成紙數三枚を超えざる範圍に於て項目順序の大要を作製し、之

を印刷に附して講習生に配付し、一方に標本類を供覧しつゝ講演をなし、又實習を要する科目に就ては簡單にこれが實際を示したりと。

○東京府の高齢者

東京府に於て調査中なりし七十歳以上の高齢者調は先月十二日を以て結了したるが、東京府十五區八郡、伊豆七島、小笠原島を通じて七十歳以上のもの、總員四萬二千八十四人、内男一萬六千八百八十六人、女二萬五千百九十八人、百歳以上の高齢者は八十四人、内男三十一人、女五十三人にして、その内東京市には七十歳以上のもの二萬八百十七人、内男七千九百七十八人、女一萬二千八百三十九人あり、これを區別にすれば日本橋區の二千七百五十二人最も多く、その最も少きは赤坂區にして六百二十人なり、又百歳以上のものあるは十一區にして總計六十一人、内男二十六人、女三十五人なるが、麹町、京橋、赤坂、本所の四區には百歳以上のものなかりしと云ふ。其の區別表左の如し。

七十歳以上

麹町	九百五十	神田	千四百十二
日本橋	二千七百五十二	京橋	千二百七十三
芝	千六百四十三	麻布	千七百七十
赤坂	六百二十	四谷	六百五十四
牛込	千八百七十四	小石川	九百三十八
本郷	千十一	下谷	千八百二十三
淺草	千九百六十五	本所	千六百九十
深川	八百三		

百歳以上

	男	女		男	女
神田	二人	—	四谷	一人	—
日本橋	六人	十一人	牛込	四人	七人
芝	—	二人	小石川	—	一人
麻布	十二人	十人	本郷	—	一人
下谷	一人	一人	淺草	—	一人
深川	一人	—			

○東京市の人口異動

東京市の調査に據れば、明治二十四年以來毎十年に於ける各區の人口異動は左の如くにて、麹町、日本橋、京橋、赤坂及び淺草の各區は、孰れも漸次減少するに反し、場末の各區、これに近き郡部の町村は、

逐年人口增加し行く傾勢を見るべきなり。

	二十四年末	三十四年末	四十四年末
麴町	六〇、六一八	五九、三六二	五四、〇三四
神田	二一、七八四	四二、三四九	一六八、二七〇
日本橋	一三五、六八九	一三五、〇四〇	一一八、六五五
京橋	一二二、七二七	一五四、一九七	一三二、二六一
芝	一二三、三一六	二四二、〇四五	一四八、三二五
麻布	五〇、四六七	五七、二六六	七八、〇八三
赤坂	三一二、〇〇一	五四、〇〇六	五一、七五五
四谷	三四五、六九八	四四、三七九	五〇、五二三
牛込	四六、八六〇	五七、六八七	一一七、六九七
小石川	四九、〇六三	六一、六三三	一二三、九六〇
本郷	六〇、九九八	一〇一、〇一六	一一一、八七五
下谷	八七、四九八	一三七、九七八	一八九、七九七
淺草	一六四、六六七	二三二、三二一	六〇六、四五五
本所	一〇五、一四六	一三八、七三二	一七六、八七八
深川	七九、二四四	一一二、八八三	一六八、八〇二
全市	一、二二四、七七六	一、六三〇、八九四	一、九〇七、二七二

○全國虎列剌の狀況

本年初發以來虎列剌患者の累計既に二千三百餘名に達し、その發生地は二十四府縣二十市百十二郡に渉り、今尚ほ終熄せず、日々三十名内外の新患者を發生しつゝあり、冬期とて油斷すべきにあらず。

廣　告

○本會例會

本月七日午後一時より神田區一ッ橋通り共立女子職業學校内に於て例會を開けり、當日の講師は、東京帝國大學產科婦人科助敎授醫學博士磐瀨雄一氏にして、日本の產婦と西洋の產婦と云ふ演題の下に、先づ分娩經過の概要を說き、次に文野に由りて分娩の難易あることより未開人種の分娩に關する風習を敍し、西洋婦人の分娩に要する時間の日本婦人に比して甚しく長きは、主として忍耐なきに由ること、又西洋婦人に難產多きは、幼時に於ける背の疾患多きが爲めにして、これを豫防するには小兒を榮養するに母乳を以てせざるべからざること、尚ほ雜婚は難產を多くする原因なることを說明し、本邦婦人の產に關する習慣の保存すべき點を擧げて、鼓舞獎勵せ

られたり。右講演終りて階下の別室に於て茶菓の饗あり、散會せるは四時過なりき。當日出席の役員姓名は左の如し

長谷川仲子　濱尾作子　鳩山春子
田村きよ子　羽田三緒子　高木鍒子
岡田德子　岸澄子　三浦敎子
宮本榮子　（以上出席順）

○新潟支會の救貧

新潟支會に於ては、昨年同市極貧者救護費中に金五拾圓を寄附したるが、本年は過般役員會の決議に依り。來る二十一日午前八時より正午まで同市西堀通六番町長善寺に於て市内の極貧者六十餘名に對し、一名につき餅米二升、鹽鮭一尾づゝを惠與することゝなれり。これ亦實に本會の主旨に出でたるものに外ならず。

○本會入會者

○事務所申込
●茨城縣土浦中城町
○長谷川仲子紹介
通常會員　菊地百合子
●麻布區鳥居坂町五
特別會員　末延田鶴子

○新潟支會入會者

○中村しげ子紹介
通常會員　石附清子

○轉居

●甲州巨摩郡鏡中條村小野醫院へ　塙とせ子
●麹町區上二番町四二へ　植村妙子
●小石川區巣鴨町四四へ　今田初子
●本郷區湯島一ノ七へ　檜山鐵三郎
●名古屋市大曾根八軒屋町三へ　飯島綾子



ユーキリン

鈴木博士發見の本品は結核、腺病特に神經衰弱症の最良強壯劑として現時治療界を風靡する有機性燐劑なり

プノイミン

肺結核唯一の治療藥たる結列阿曾篤の副作用を除き然も其効果を完全にせしはスパイヤー博士發見の本劑なり

・説明書郵呈

東京市日本橋區室町三丁目　三共合資會社

タカヂアスターゼ

高峰博士發見の本劑は効力顯著なる胃腸新藥なり

類似品あり注意

グリコナール錠

北里博士指導佐伯矩氏創製の本品は衰弱者肺病其他慢性諸症に卓効ある滋養新劑なり

・説明書郵呈

東京市日本橋區室町三丁目　三共合資會社

（後附の一三）

毎月一回

女子教育

一日發行

十卷發行

東京女子高等師範學校教授 文學士 下田次郎 主幹

會員募集

女子は社會文明の源泉、家庭和樂の主神、兒童教育の慈母なり、この重任を負へる女子の性能を研究し、廣く學校、家庭、社會の各方面に於ける女子教育の發展を謀るために、本會は世に出でてより既に九年、機關として毎月一回雜誌を發行し、又、婦人通俗學術講話會を開き、其他各種方面の研究を進めつゝあり、何人にても入會を許す。會費一ケ月金十錢、半襟一掛、手巾一ダースを節すれば、一ケ年の會費優に餘りあり。雜誌女子教育は主張、論說、研究、叢談、紹介、文苑、雜錄、彙報、交詢等の諸欄を設け、生物學、生理學、教育學、社會學、心理學、衛生學、其他女子教育の研究に必要なる材料を收錄す。

本會の役員は左の如し。

東京女高師教授文學士 下田次郎
學習院教授文學士 尾上八郎
三輪田高女教頭文學士 三輪田元道
淺野家子弟教育顧問 石橋臥波
醫學博士 三宅鑛一
文學士 倉橋惣三
文學士 鵜飼祐一
門井女學校主 門井守次郎

東京女高師教授 篠田利英
東京女高師講師 安井哲子
奈良女高師教授文學士 雀部顯宜
ドクトル 富士川游
文部視學官 槇山榮次
文學士 和田鼎
成女高女校長 宮田脩

女子大學教授 高島平三郎
東京女高師教授 西島富壽
實踐女學校教師 原田稔市
醫學博士 永井潜
文學士 菅原教造
文學士 泉道雄
學習院教授文學士 白石正邦

見本郵券十錢送れ

東京本郷區彌生町三番地
大日本女子教育會

大正二年一月十周年記念號發行

私立大日本婦人衛生會役員氏名

會長 侯爵夫人 鍋島榮子
副會長 男爵夫人 濱尾作子

（いろは順）

幹事 鳩山春子
同 岡田徳子
同 山本多穗子
同 松平芳子
評議員 石川貞子
同 濱田捨子
同 服部繁子
同 四外子
同 緒方悅子
同 小川孝子
同 片山龜子
同 丹波貞子
同 田村きよ子
同 男爵夫人 南部暇子
同 山口貞子
同 古市幸子
同 岸澄子
同 三宅藤子
同 宮下咲子
同 羽田三緒子
同 高木鍒子
同 三浦故子
同 岩下ゆか子
同 長谷川仲子
同 仁禮壽賀子
同 土肥多越子
同 岡山とし子
同 男爵夫人 加藤鈴子
同 吉武緋枝子
同 高橋孝子
同 鵜原誠子
同 中濱芳子
同 子爵夫人 松井正子
同 伯爵夫人 阿部篤子
同 菊池綮子
同 宮本樂子
同 守屋千代子

婦人衛生雜誌代價及廣告料

代價

一冊 定價金貳拾錢 郵稅壹錢
三冊（三ヶ月分） 前金郵稅共 金四拾五錢
十二冊（一ヶ年分） 前金郵稅共 金壹圓八拾錢

廣告料

一頁六十二行 一行二十三字
壹頁 金五圓 半頁 金貳圓五拾錢
○特別廣告 壹頁金拾圓 半頁金五圓
○半頁以下行數ヲ以テ計算スルモノハ一行貳拾五錢

規定

○本誌講讀申込ノ節ハ前金三ヶ月分以上本會事務所宛ニ送附セラルベシ但シ見本ハ郵券ニテ貳拾壹錢代用苦シカラズ○本誌休讀ノ節ハ速カニ報知セラルベシ通知ナキ分ハ講讀者ト見做ス但シ後金ニハ割引ナシ○轉居ノ節ハ新舊宿所通知セラレタシ

大正元年十二月十七日印刷
大正元年十二月二十日發行

編輯者兼發行者 東京市本郷區根津西須賀町九番地 菲司秋次郎
印刷者 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 今井甚太郎
印刷所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 杏林舍

發行所 東京市麴町區富士見町二丁目三十二番地 私立大日本婦人衛生會事務所

賣捌所
東京市本郷區龍岡町 吐鳳堂
同市銀座四丁目 東海堂
同市京橋區鎗屋町 良明堂
同市本郷區本富士町 明文館
同市同區春木町 南江堂支店
京都市寺町二條南入 若林茂一郎
東京市日本橋區吳服町 北隆館
同市神田區表神保町 東京堂
同市本郷區本富士町 盛春堂
名古屋市本町三丁目 丸善書店

醫學博士 原榮先生立案講述

通俗 肺病豫防及私宅療養教則

全壹冊
菊判洋裝美綴
正價金八拾錢
郵稅六錢

正確有效なる肺結核療養法を行はんと欲せば豫防及養生の根本觀念に通曉するより緊急なるはなし。本書は其根本觀念を社會に普及せんが爲め、在來の養生書と異り最近の肺病療養法をば悉く簡明なる七十餘條の教則に列擧し、一々詳細なる註解を加へ、更に應急處置、食餌法百餘項を附錄とす、實に肺病患者最良の教科書なり。家庭醫、家族、看護人諸君は之れに據り直ちに今日より最も有效なる療養の準備に着手せよ、正確なる療養の着手若し數日を遲るれば肺結核患者治癒の時日は乃ち數月を遲る可し、此書を讀みて尙肺病の不治を嘆ずる者ありや。

吳博士序

東京醫科大學精神病學教室
東京府巢鴨病院醫員 醫學士 杉江董先生述

通俗 精神病講話

全一冊
四六判美綴
精巧寫眞版圖畫
多數插入
正價金五拾錢
郵稅六錢

人一度該病に罹るや、直ちに以て恢復の策無きものとして袖手傍觀措まゝに病魔の蹂躙するに任かす、然りと雖、精神病の原因發生は如何なるものなるかを熟知し、之れが豫防治療の道を講ずるに於ては必しも精神病は毎に至難不治の疾病に非ざることを斷言するに憚からず。弊堂玆に見る所あり多年東京醫科大學精神病學教室に於て吳博士指導の下に本病を研究せられつゝある杉江學士に乞ひて本書を公にす。解說平易簡明、一は以て家庭の讀物となり、一は以て醫家教育家の參考書となる、卷中精神病患者の寫眞數十葉を插入す。蓋し本邦に於て此種の書籍は本書を以て嚆矢とす

東京市本鄉區龍岡町・振替東京四一八番

發行所 〔電話下谷一六七二番 電話下谷四〇七九番〕 吐鳳堂書店